

岩谷堂城（柄杓城） 江刺市岩谷堂字館下

岩谷堂（旧片岡村）は北上山地の一支谷の出口に発達した典型的谷口集落の一つであるが、岩谷堂城は、その市街地の西北部の丘陵上に立地する。北から南へのびる丘陵の南端部近くに占地し、頂部の比高70mである。東方崖下には人首川が南流する。

本丸とされるのは、北端部の最高位部、八幡神社境内の地であり、規模は90m四方前後に達する。その周縁部には土塁がめぐらされ、さらにその東方斜面下位（人首川に面した崖上）には帯状の腰郭が取り付く。

本丸と思われる郭の南西部に、腰郭と空堀で区切られた小郭を隔てて二の丸と思われる郭がある。現在は県立岩谷堂高等学校のグラウンドとして利用されている平場であり規模は本丸より広大である。その西～南辺に堀が残存し、一部は水堀状になっている。ここまでが内郭とされている。

さらにその南西部の県立岩谷堂高等学校校舎や、市立岩谷堂小学校校舎等が所在する広大な地域は外郭とされ、その周囲には腰郭が数段にわたり築成されていたものと思われるが、宅地化等のため詳細不明である。

本丸とされる八幡神社の脇に延慶2年（1309）の古碑があり、その内容は次のとおりである。

右志者為女房父母也

右志者為父母聖靈

延慶二年六月十五日

兼又法界衆生故也

右志者四郎二郎父母為也

これによると、当城の創建は南北朝時代をさらにさかのぼる可能性がきわめて強い。

最近、この城を、藤原清衡の平泉以前の豊田館跡、あるいは、安倍氏の諸柵の一つの鶴脛柵に擬定する説が表明されているが、この城の起源は従来の想定よりかなり古くなることだけは確実であろう。

鎌倉時代には葛西氏の支配下に入り、江刺郡には千葉頼胤の三男胤道が配されたとされる。胤道を岩谷堂城主とするものと豊田城主とするものの二説がある。

南北朝時代以後、江刺氏は江刺郡の惣領職であったと思われ、「奥南落穂集」に葛西宗家五代の孫葛西信詮の次男江刺次郎信満を岩谷堂城主と見えている。

江刺氏はしだいに勢力を拡大していき葛西宗家と対立するようになり、康安元年（1361）郡内の浅井村で合戦があり、続いて文明17年（1485）には江刺隆見と葛西政信の合戦があり、明応4年（1495）にも再戦している。この戦いでは江刺方は敗れ、岩谷堂城は葛西政信の政重胤が相続し、郡内を再統一している。重胤の数代後と思われる信時は天正

13年（1585）頃、葛西宗家に勘当され、重恒が城主を継いでいる。

葛西氏は小田原参陣を果たす没落したが、重恒の養嫡子重俊も天正19年（1591）桃生郡深谷で討死している。しかし、奥州仕置に下向した浅野長政は、重恒を南部信直に託した。信直は重恒を稗抜郡新堀城に配し、さらに慶長17年（1612）6月に養嫡子重隆の子隆直は、新堀城から土沢城に移封され、伊達領域との警備の任に当たった。

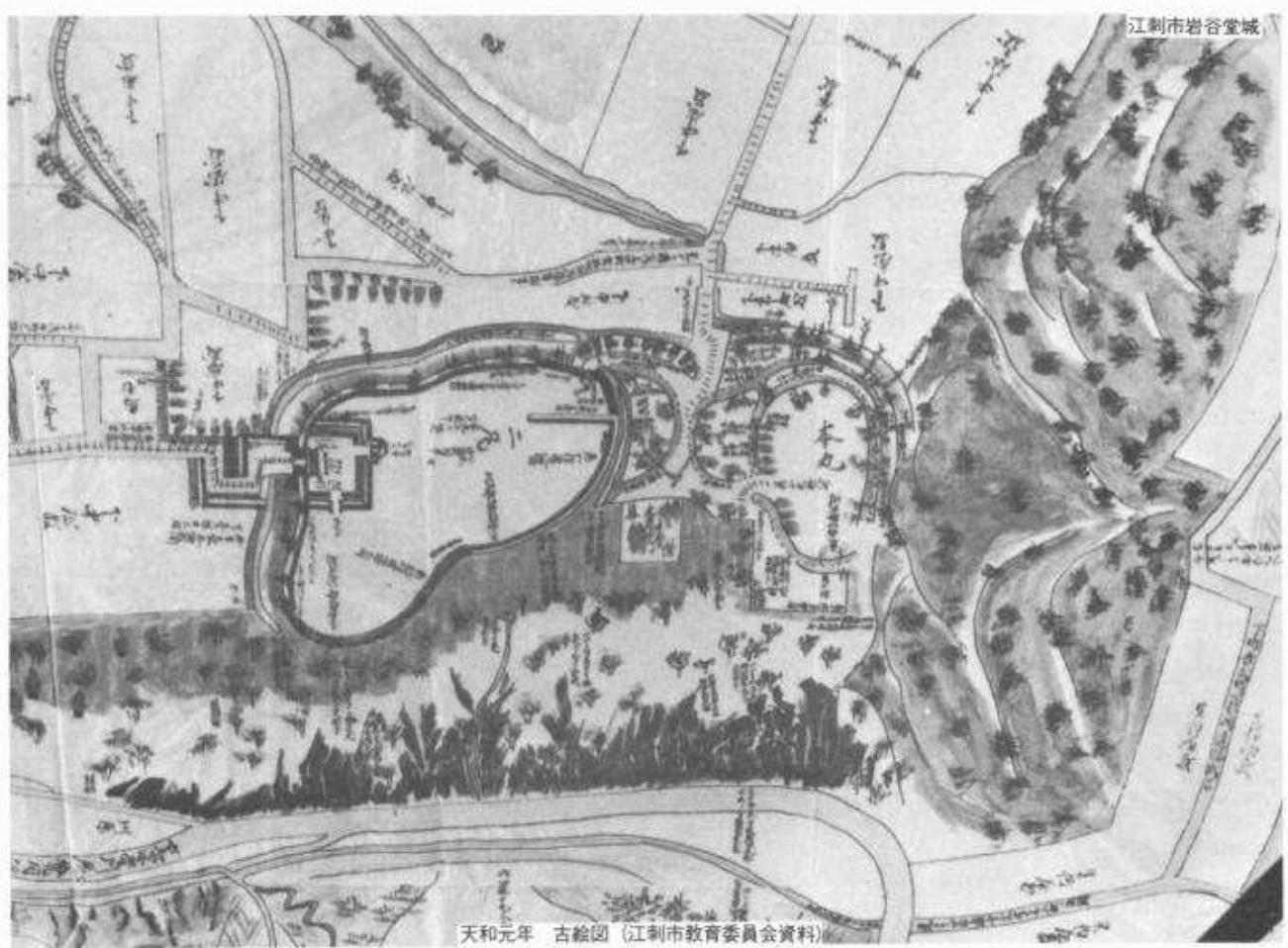
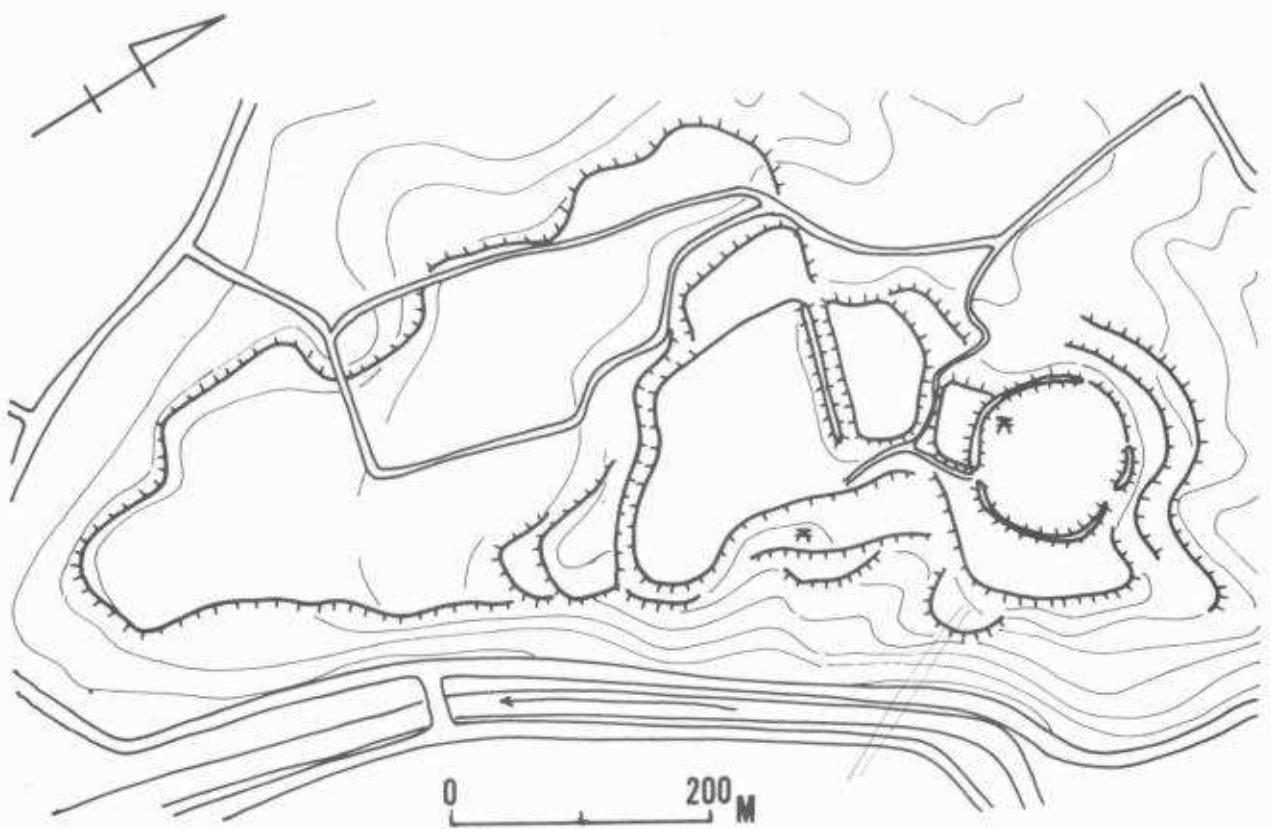
江刺氏の去った岩谷堂城には、木村伊勢守吉清の臣溝口外記が入ったが、天正18年の一揆によって殺された。続いて伊達政宗の臣桑折摂津守が入った。彼は領内に用水堀を開削したり、湿地を干拓するなど、その整備に努めたとされる。岩谷堂城の改修は創建期からたびたびくり返されたと考えられるが、大手の移転など城内の大规模な改修は万治2年（1659）に城主になった岩城宗規によるものとされる。仙台領の北境という要衝の地であることから、伊達家はその一門の岩城氏を配したものである。以後、岩谷堂要害屋敷として明治維新までその支配下にあった。

昭和58年に実施された本丸と二の丸の中間部の発掘調査によって各種の遺構と遺物が発見された。古絵図による「本毘沙門」を含む部分である。遺構類は、空堀2、井戸2、溝6、柵列1、銀治場と思われる工房跡2、土壙54、堀立柱建物と思われる柱穴329、平安時代後半の竪穴住居跡1などである。

遺物としては、土器・陶磁器が多い。そのうち中世のものをあげると、舶載陶磁器に青磁碗・白磁皿・梅瓶・染付碗・皿がある。国産品には瀬戸、美濃鉢皿・鉢・平碗・梅瓶・灰釉小皿・天目茶碗・黒褐釉壺がある。地元産と思われるものには小形のかわらけ、瓦質の火舍・擂鉢・甕などがある。この他に金属器・石製品・木製品がある。

限られた範囲の試掘調査ではあったが、多大の成果をおさめたものといえる。



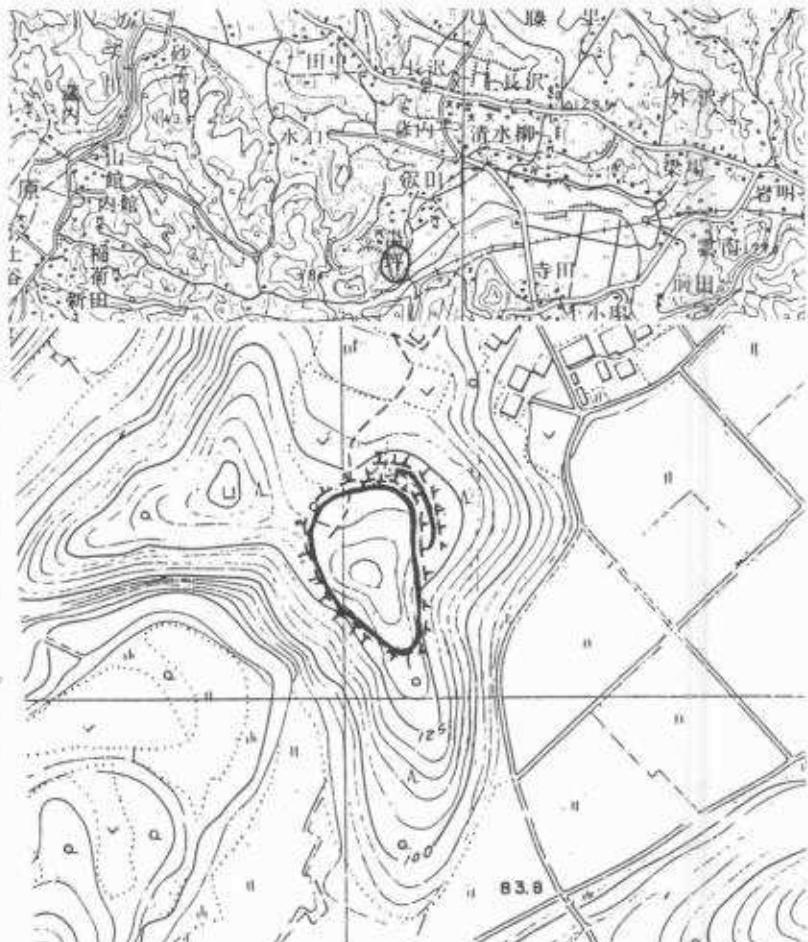


沼尻城 江刺市藤里石名田湯坪

遺跡は比高50mの丘陵頂部につくられた2つの平場からなる。うち一方は、南北50×東西30mの楕円形の平場であり、5~6m下位に巾5mの腰郭がめぐる。東方のものは南北20×東西25mである。南側及び西側は急崖であり、北側の一部は比較的緩斜地で将軍寺跡に続いている。北方30mの高位部に愛宕神社が祀られている。

「仙台領古城書上」には、東西45間×南北28間、城主及川弥兵衛直澄と見えている。

旧横瀬村の及川氏は、東山鳥海郷を本拠地とする及川氏の一族とされる。享禄2年(1529)7月、江刺美濃守重見と東山鳥海郷の及川豊後守重純が不和になり、横瀬村で合戦している。この合戦で重純は戦死した由である。「岩手県史」には、天文~永禄年間(1532~70)に、横瀬村に横瀬播磨藤原信実が住していたとあるが、この人物は詳細不明である。



白幡城（白旗城） 江刺市稻瀬瀬谷子

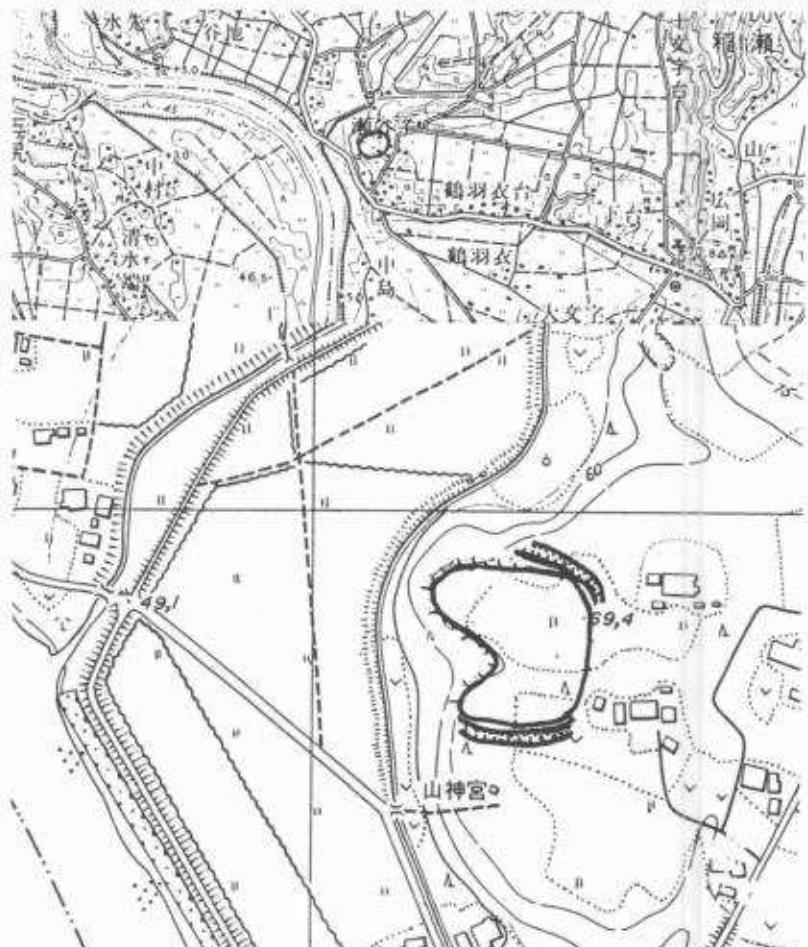
北上川を西方眼下に眺む丘陵端部に立地し標高70m前後である。平安時代の官窯と思われる瀬谷子窯跡群の西方である。

開田され詳細は不明だが、全体規模は東西×南北各100m前後と思われる。

南北に幅5m、深さ2~3m、長さ50mほどの空堀が見られ、西方には南北方向の土塁が存在したといわれているが、現在は若干残存する程度である。

南方は、空堀を隔てて平坦な畠地となっており、何らかの郭の可能性もある。西方及び北側は急斜面、東方は平坦部である。

居城者等は不明であるが、源頼義の陣所との口碑や、南部和賀郡主和賀主馬祐忠親の妻との伝えがある。



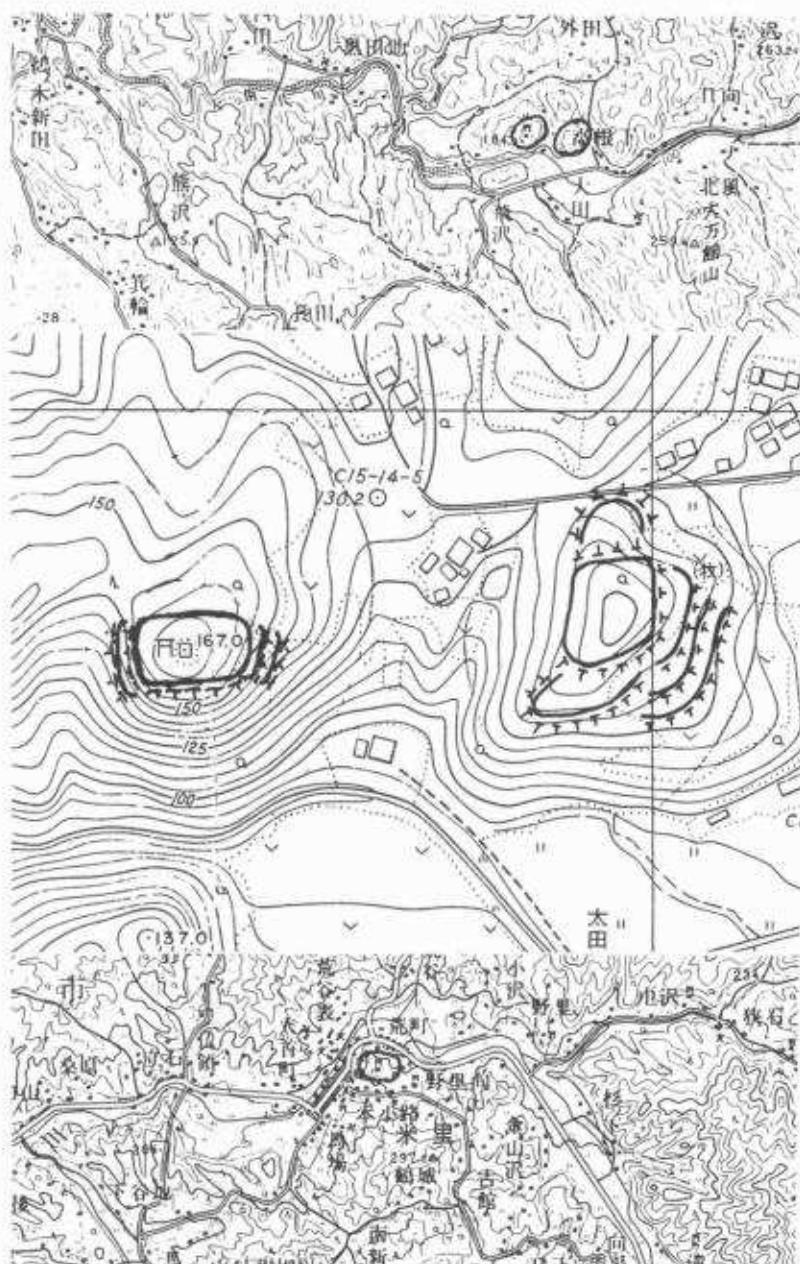
太田代城 (太田代館・含太田代古館) 江刺市田原高根下

東西にならんで2館が所在する。東方の比高50mが太田代城、西方の同60mが太田代古館である。後者の頂上には五十瀬神社がある。

太田代城は頂部平場30×20mで、10m下位に50×20~30mの腰郭が取り付き、南東面に数段の腰郭が付く。

太田代古館は、頂部平場50×80mで、北と北東に数段の段築成が見られる。西方10~12m下位に南北40、東西10mの腰郭が付される。

「仙台領古城書上」には太田代城、東西18間×南北20間とあるが、上記のいずれをさすか不明である。また同書には城主太田代伊予とある。太田代氏は角掛菊池氏の分流と伝えられている。太田代伊予は、天正15年(1587)父の青籠城主菊池右近恒邦とともに主人の江刺三河守信時を諫言して逆に討たれたと伝えられている。太田代氏は葛西氏没落後、江刺氏とともに南部に出仕し、土沢城下に居住している。

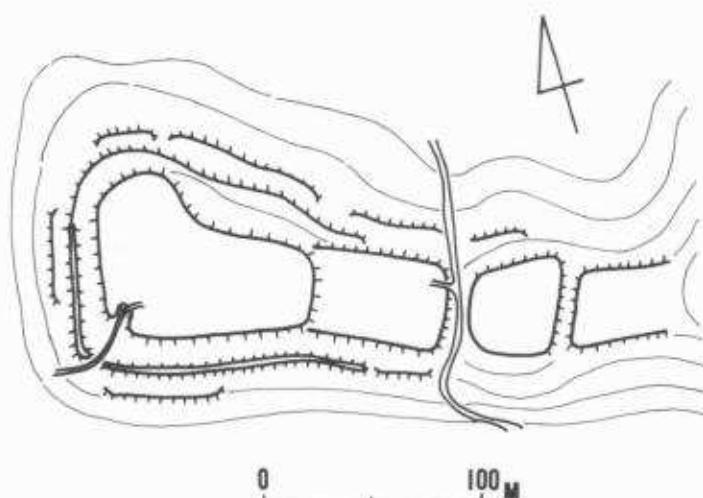


人首城 (城山) 江刺市米里城内

現在の人首の市街地東方の裏山一帯である。本丸とその周囲は保存良好であるが、二の丸は削平されている。人首川に沿って東から西にのびた比高約40mの丘陵の先端部に立地する。頂部に三つの平場が築成される。本丸とされるのは西端の平場で約7,000m²で、その他のものはそれぞれ2,000m²前後である。

周囲の斜面は段築成される。うち一段目は巾15mで、西辺から南辺には土塁が伴う。なお本丸跡西南部に樹形門も存在した。また、中央の平場は庭園跡とも考えられている。

人首地区には戦国時代から江刺氏の人首氏があり、葛西氏没落後に南部家に出仕している。「仙台領古城書上」には城主は安藤修理と見えているが、人首氏との関係は不明である。江戸時代には仙台藩の藩境警備のための重要な拠点として扱かれて、伊達政宗は慶長11(1606)年に沼沢摂津守重仲を下向させ、いわゆる「要害」として人首城の改修と城下の整備にあらせた。



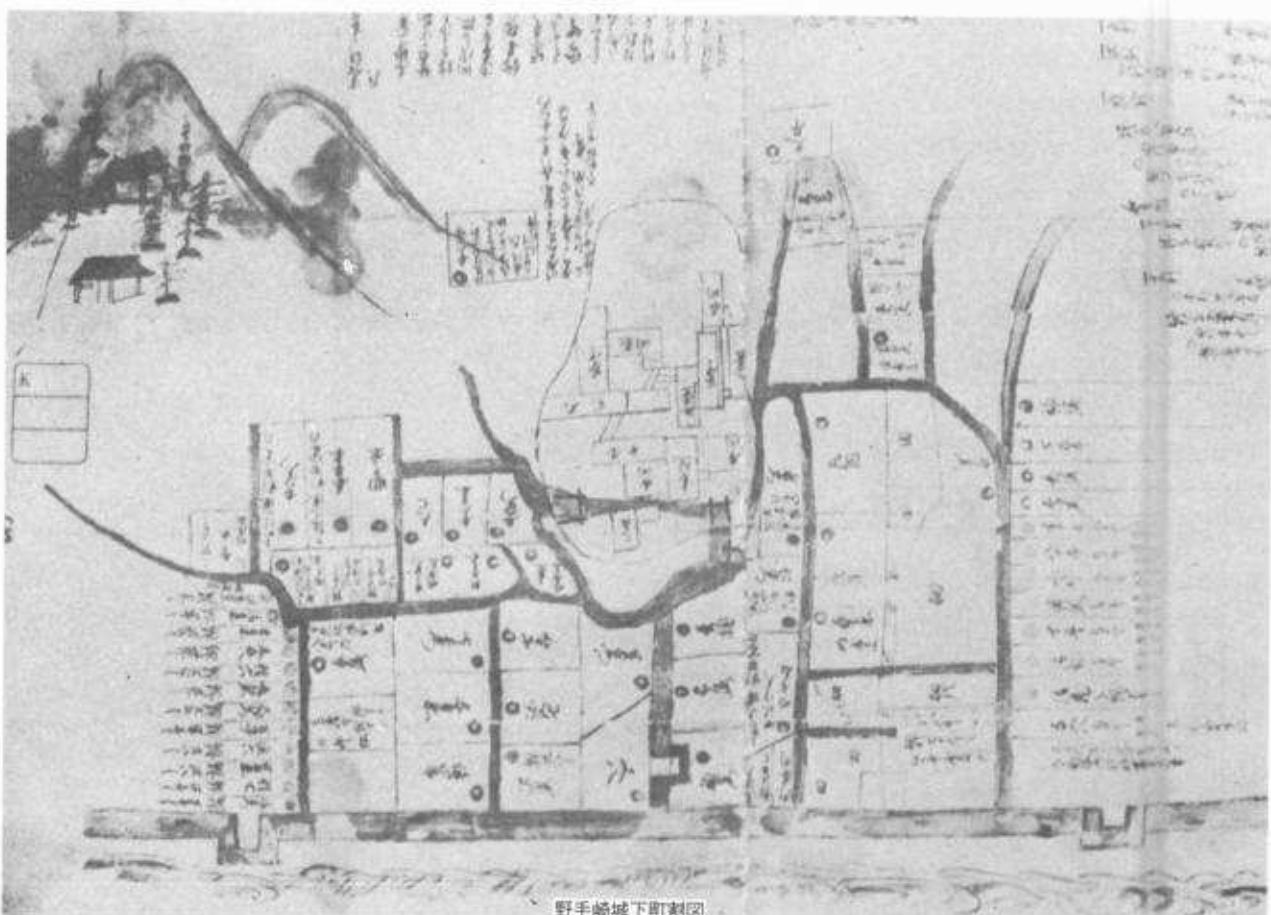
小梁川館（野手崎城・高屋敷館）江刺市梁
川野手崎館下

梁川地区の市街地西方の丘陵上に立地し、標高 170m 前後である。領主の子孫の伊達氏の屋敷の西方上位の平坦部を高屋敷筋と呼ぶ。

さらにその西方に凹地を隔てて2段からなる郭があり、小梁川館と呼ばれる。地元保存会により、本丸跡、武道館跡、二の丸、大手門跡などが標示されている。本丸は30×50mほどであり、西方に堀がうがたれる。

小梁川館の主は正保元年（1644）以来、幕末まで小梁川氏であり、仙台領の北境の固めとして配されたものであった。

両館の関係は不明である。「史料仙台領内古城・館」によると、高屋敷館は伊達家臣大立目氏が天正から寛永末期までの50年間の居城、小梁川館は前記の小梁川氏が居城したとしているが、前後関係を示す明証はない。小梁川氏が両者を活用したものと見做しておきたい。なお、年代不明であるが、江戸時代の野手崎城下の町割り図を写真で示しておく。



野牛高城下町宿圖

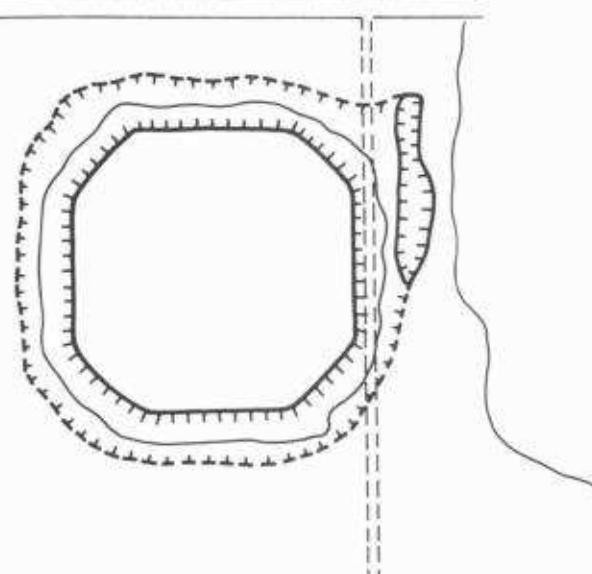
九郎館（小山城・小山古城） 胆沢郡前沢町古城字南上野

胆沢段丘東縁部にあり、北を明後沢川に、南を小谷に画された三方が急峻な地形。館の規模は東西、南北ともに約 150 m ある。標高約 70 m の平坦な本丸が主体を占め、南に空濠を隔てて二の丸、西に空濠を隔てて三の丸をもつ。空濠は幅約 5 m で三の丸では北と西側にもめぐる。本丸西縁部には土塁痕跡が残る。また、本丸と二の丸の東面に幅広い腰郭がめぐっている。いま本丸と二の丸を画す空濠跡の小径を下って東の集落に至る所を「館下」と言う。二の丸東麓部に大林寺がある。「古城書上」には中世末期で櫻山九郎の居城と伝える。当館の北、明後沢川を隔てた同一段丘上に宗角館、八郎館が続き、当館東方約 1 km の平地に中畠城がある。



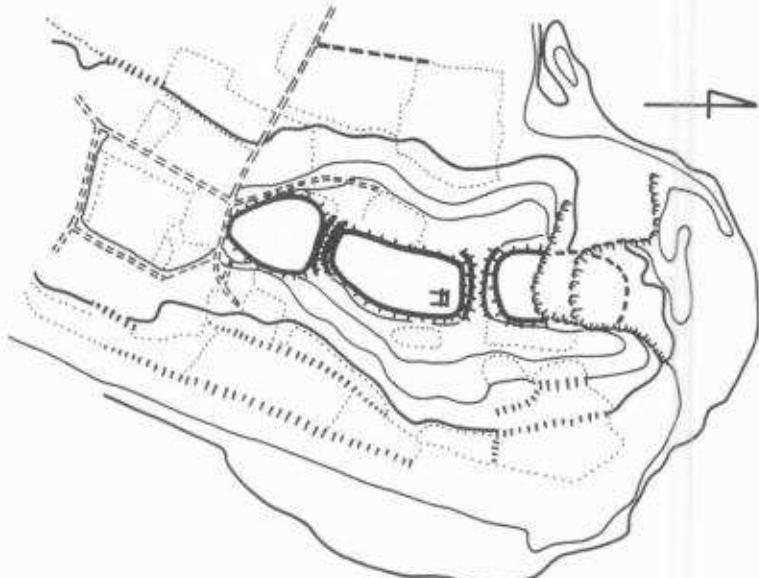
上麻生城（大麻生野柵・大麻生城） 胆沢郡前沢町白山字内館

東に北上川を望む、微高地にあり、一帯は標高 27~28 m の平坦な水田地帯である。もとは土塁と濠で構成された単郭式の館跡だというが、水田開発による破壊のため、東側の周濠約 30 m が残存するだけである。往時は一辺約 150 m の規模であったという。館のあるこの一帯を館集落と言い、さらに館の周辺を「内館」と言う。南方に白山神社が、北方に正福寺がある。「古城書上」には城主上麻生玄長（あるいは玄長入道）と記す。麻生玄長は安倍頼時の臣であり、平安後期の事件を記した『陸奥国史』に載せる「大麻生柵」に比定する考え方もある。



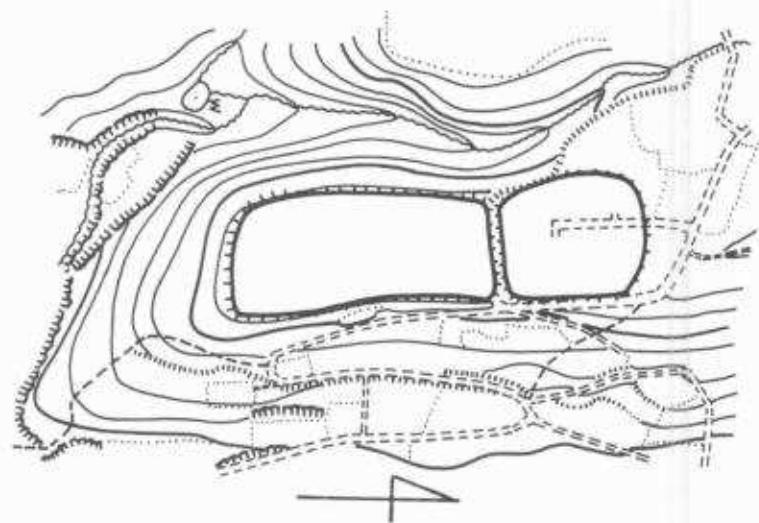
白鳥館（白鳥館・白鳥古館） 胆沢郡前沢町白鳥字白鳥館

北上川が削り残した残丘突端に南北方向に占地する。対岸には北上山地が迫り、河川の狭隘部ともなっている要衝の地。北から本丸、二の丸、三の丸とあり、各郭を空濠が画す。また、本丸・二の丸の西辺にも空濠がある。本丸の大半は破壊され、二の丸が残存良好である。二の丸は標高27~28mの平坦部からなり、面積約2,400m²、西縁部に南北方向に土塁痕跡が残る。三の丸は南の郭で後館ともいう。南北80m、東西34mの矩形を呈す。本館の推定規模は南北約300m、東西約40m前後と考えられる。本館は安倍氏の本拠地衣川櫛と関係が深く、ここには末子安倍八郎行任が居城していたと伝える。また、中世初期には山名氏が居り、さらに中世末期には岩渕氏や白鳥氏なども居城したらしく、古代・中世と居館者に多少の変遷がみられる。



前沢城 胆沢郡前沢町字陣場

胆沢段丘縁部にあり、南を太郎カ沢川が限る。いまは公園化による破壊のため遺構は全くない。標高約80mの平山城で、推定規模は東西約70~85m、南北270mの南北に長い城で、うち約3分の1を北にある二の丸が占め、残りは本丸となる。二つの郭を空濠が画したと想定される。本丸の南端部、一段低い所に物見台があったという。城主は中世初期には三田氏が入城し、約400年間の治世を行ったといい、天正年間に樺山氏が、晩年に大内氏が入城したが、その治世は数年といわれ、江戸時代初期には廃城となった。

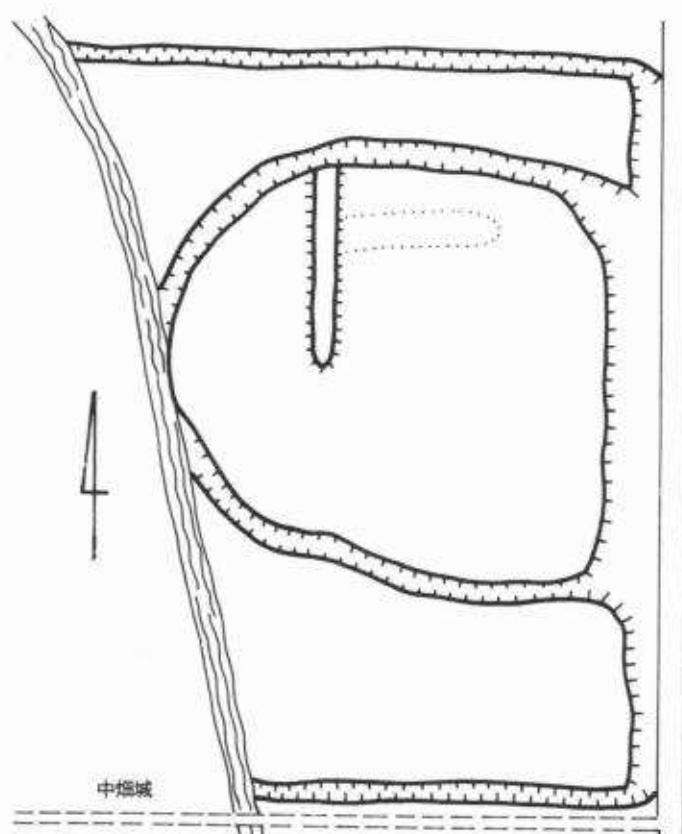
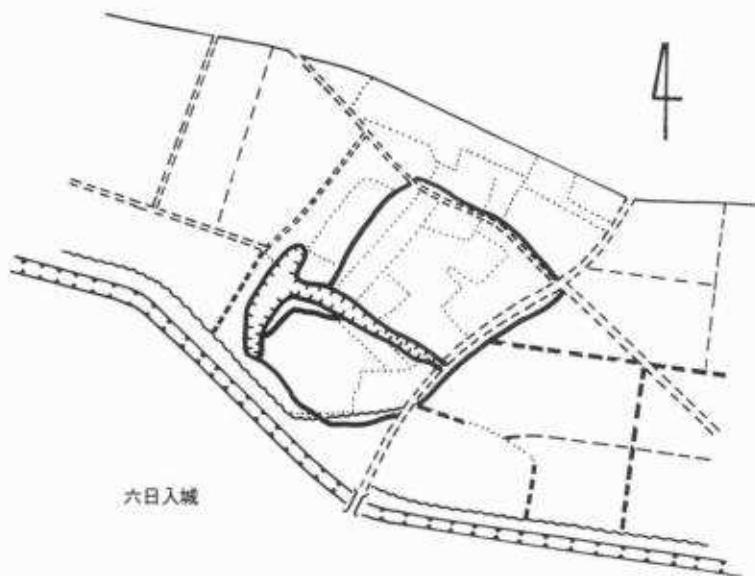


六日城（六日入柵） 胆沢郡前沢町白山字古館

中畠城の北東約1kmの標高約33~34mの水田地帯の微高地上にある館。南を松ノ木沢川が限り、三方を幅5~10mの水濠で画した平城で、全体規模は南北約170m、東西110mの南北方向に長い矩形を呈す。本丸の北と西面に二重の土塁をめぐらし、土塁間を空濠とする。二の丸は本丸の南にあって幅10m前後の水濠で区画される。本丸に小社、二の丸に天神様の小祠を有す。立地、景観ともに中畠城に似る。築城者は安倍氏一族といわれるが詳細は不明である。

中畠城（櫻山館） 胆沢郡前沢町古城字水上西

九郎館の北側を開拓してきた明後沢川は東流して平地に出る。そして蛇行して当城の西を旧河川は限っていた。城は標高30~34mの水田地帯の中にあって、一段高い所を主郭（北の郭）、その南に低い副郭をもつ。全体の規模は東西100m、南北200mで大半を主郭が占める。主郭の周囲には幅5~10mの水濠跡がめぐり、今は水田に供されている。また南の郭の周りにも同様の濠がめぐる。館の東を「館八反丁」と言う。またこの南を「宿の前」といい、さらに「水尻館」と呼んだことがある。室町時代後期の城主は柏山一族の平友常とみられるが、詳細は不明である。



大林城（百岡城） 胆沢郡金ヶ崎町永栄字西柏山館外

胆沢川に沿うように東へ張り出してきた高位の西根段丘先端部にある。城造営時に大地形を実施したらしく、地形は平坦ないし、緩傾斜である。南に胆沢川を、北に永沢川を控える台地上で、標高104～109m、周辺との比高差30mである。大林城は全体の規模が東西490m、南北350mと雄大で、西郭の松本館、東南郭の生城寺館、北郭の大林城の三区画からなる総称でもある。松本館は略述したので省く。

大林城は本城の主郭で、東西120m、南北200mの規模である。四周に幅10～20mの空濠を構えるが、北東部はほとんど破壊されている。西南濠は松本館と画し、南東濠は生城寺館と画する機能を合せもつ。北東から東側一帯は空濠の外に当る平坦地だが、ここからは家臣団の宅地が発見されている。

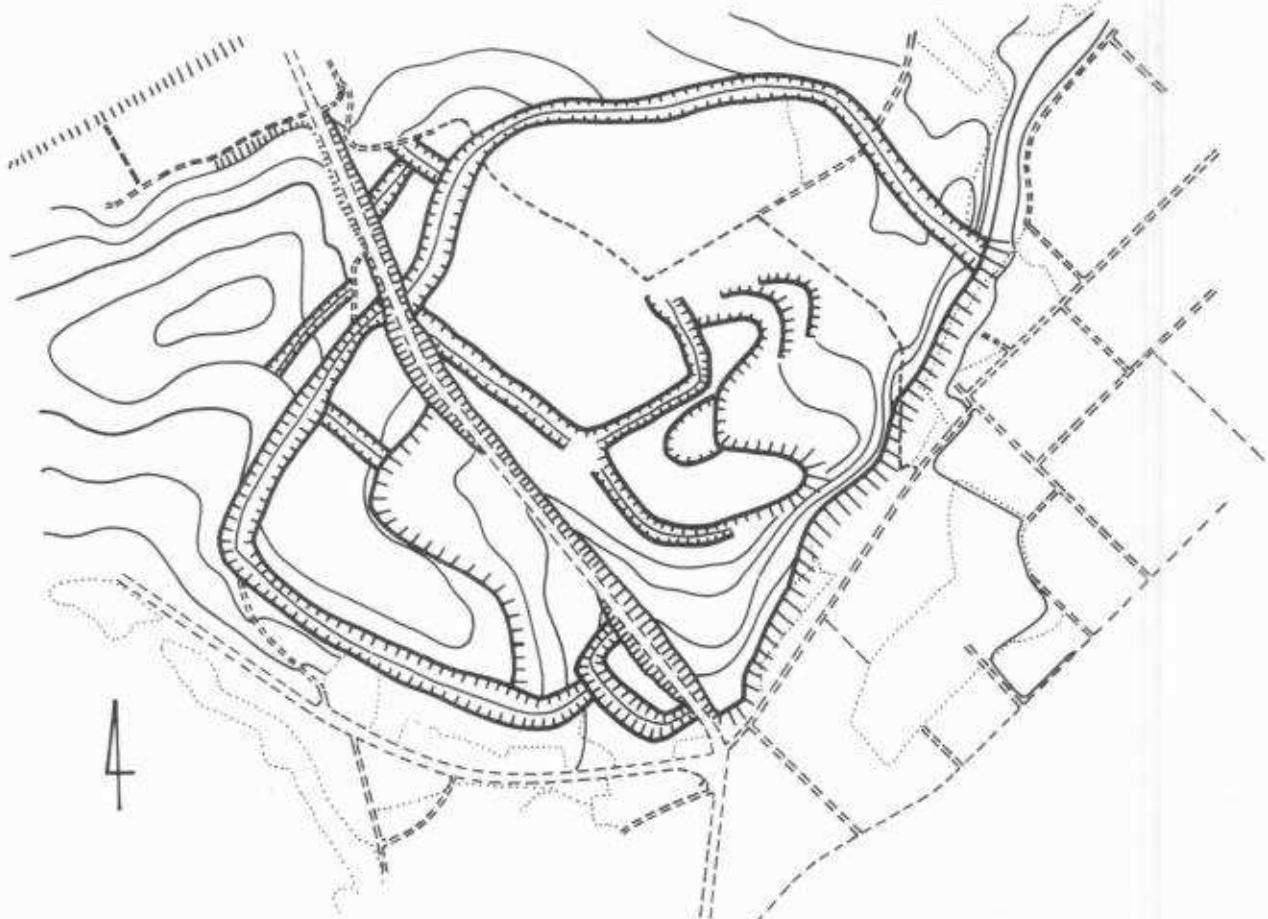
この平坦部はいくつかの堀（薬研堀）と溝によって区画される。この堀は井戸とも関係をもつ。一区画の中には、主要建物数棟に付属建物、井戸が組み合わさる。また、中世の竪穴住居群が一画にまとまる地域がある。主要建物は、掘立柱で3×1間の身舎に、両側に廂をもつ形と、三方に廂をもつ形の2つの

形態がある。屋根は板葺か草葺と推定される。遺物には中世陶器が多い。

これが、中世地侍の居館ないし、居宅のあり方の一類型であろう。同一パターンがいくつかの区画に認め得ることは、宅地割りが実施されたことを推定せしめる。日常の地侍の消費単位が成立している。

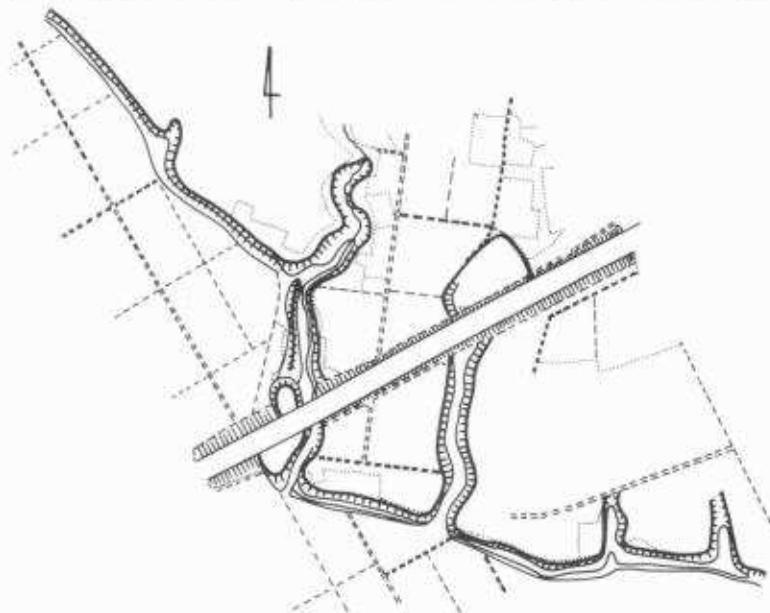
大林城を柏山館ともいうことがある。これは葛西の家臣柏山氏が建仁年間に入城したことによる（前身は千葉氏）。以来大林城は、天正18年（1590）に秀吉の奥州仕置によって滅ぼされるまでの380有余年間の、胆沢地方の政治、経済、軍事、文化の中心地となった。

同一丘陵西方に観音寺廢寺があり、一部調査された。正面に須弥壇をもつ本堂、両脇に小塔、僧房が配され、すべて礎石建ち建物である。柏山氏の菩提寺的性格が強い。



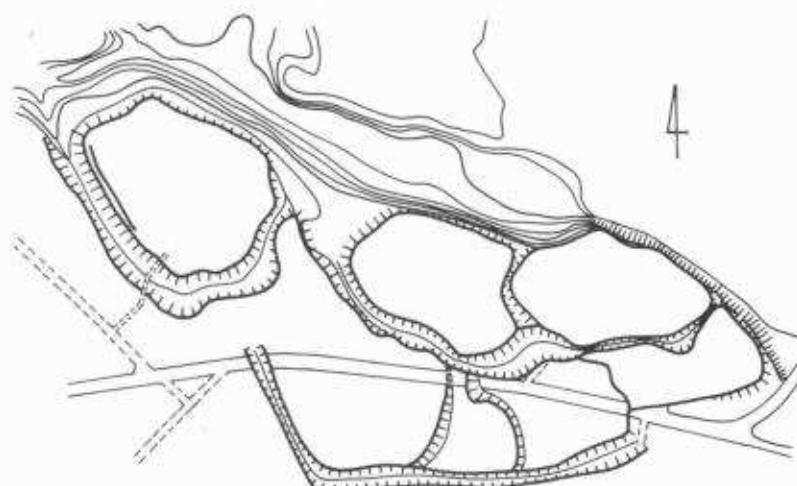
鳥海柵 (弥三郎館) 胆沢郡金ヶ崎町西根
字鳥の海

胆沢川北岸の金ヶ崎段丘上に立地する。一帯は標高60m前後の平坦地で周辺には小谷が幾つか開析している。当遺跡は発掘調査され竪穴住居跡、掘立柱建物跡、柱列、溝、鉄津堆積、焼土遺構などが発見され、「陸奥誌記」に記す鳥海柵の有力擬定地である。規模は東西約300m×南北150mの範囲の単郭。一部に空濠が認められる。平安時代後期安倍宗任(鳥海三郎)の居城。



金ヶ崎城 (胡桃館・白糸城) 胆沢郡金ヶ崎町西根字白糸・仮屋

金ヶ崎段丘(水沢段丘)東端部、北上川と胆沢川の合流する北岸平坦地にある。標高52~54mと起伏が少なく、現在郭は5郭ほどが北西-南東方向に約600m、北東-南西方向に170mの範囲の中に認め得る。すなわち北西端から順に丸子館、二の丸、本丸、東館、その他である。古絵図に掲れば、二の丸と本丸の間に崖際に藏館があり、また東館に隣接して觀音館があることになっているが、藏館は北上川によって削られ、觀音館は宅地化している。各郭は幅10~15mの空濠で囲まれ、北西部は自然地形の崖利用。二の丸西辺の一部に高さ0.5mの土塁が残存している。古錢陶磁器が出土している。城主は戦国時代までは葛西家臣、小野寺氏が居城、近世初期には桑折政長、伊達宗利と続き、宗利転封後は藤沢から大町定頼が入城した。一帯の地名を城内という。



細越城（参居館） 胆沢郡金ヶ崎町永采字茶畠外

城は標高126～130mの三郭を頂点とする西根高位段丘を利用した平山城。周辺との比高差20～30mある。規模、構造は東西約750m、南北220mの東西方向に長く延びる舌状段丘の基部を使い、基部は空濠で画す。段丘中央部が一段低くなり、西郭と東郭とに分かれ、東郭が僅かに高い。西郭は南面を残して空濠がめぐり、それは東郭においてもほぼ同様である。西郭西端部に100×70mほどの空濠で画された小郭がある。段丘北面麓部の北には幅30～40mの小区画水田が東西に延び、そのあり方は当城に付属した遺構の1つであることを推定させる。東郭内に熊野神社がある。



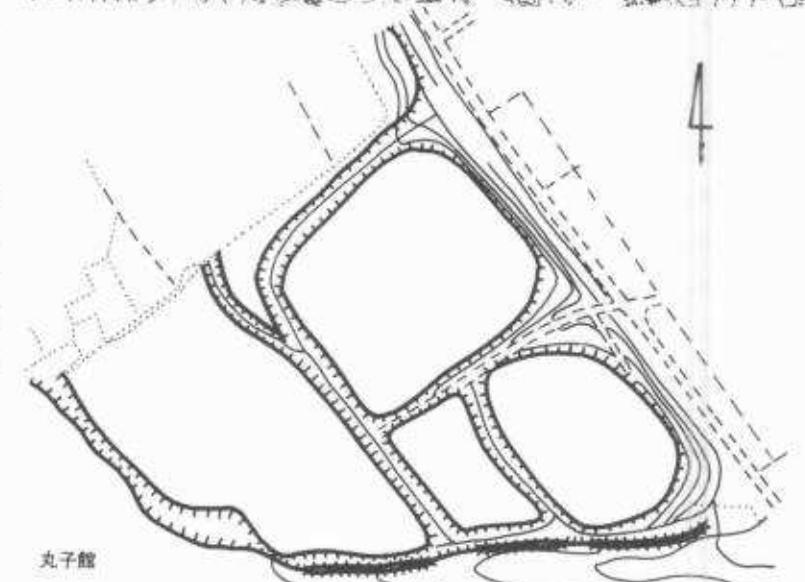
丸子館（三ヶ尻館） 胆沢郡金ヶ崎町三ヶ尻字清水端

金ヶ崎段丘東端部にあって3～4郭からなる。全体規模は東西150m、南北130mほどで、一帯は標高50～55mの平地である。北郭が高く、南郭が低い。各郭を幅3～4mの空濠がめぐってそれぞれを画すが、南面は東流する小河川に、東は北上川河道で限られる地形。葛西時代の城主は三ヶ尻氏で、近世初期には廃城となった。



道所森館 胆沢郡金ヶ崎町六原字道所森

金ヶ崎段丘上に削り残された西根段丘の先端を利用して館跡。標高117mの頂上を本丸として南に腰郭を付し、最下郭を帯郭とした輪郭式平山城。帯郭に高さ0.5mほどの土塁がめぐるが、うち西側部分に至るほど高く大きい。帯郭から本丸までの比高差約7mある。城主は道心道正と『古城書上』にみえる。



松本館（半入館） 胆沢郡金ヶ崎町永沢字
松本館

大林城の西郭を構成する館で、東へ舌状に張り出す地形を利用した平山城。北側裾部を永沢川が東流する。西辺と南辺の遺存状況から東西240m、南北110m前後の規模か。標高約109mの一郭で四周に10~15mの空濠を配し、西側はさらに一段低い小空濠を掘削している。築城主は松本日向といわれる。本来は大林城の一部か。



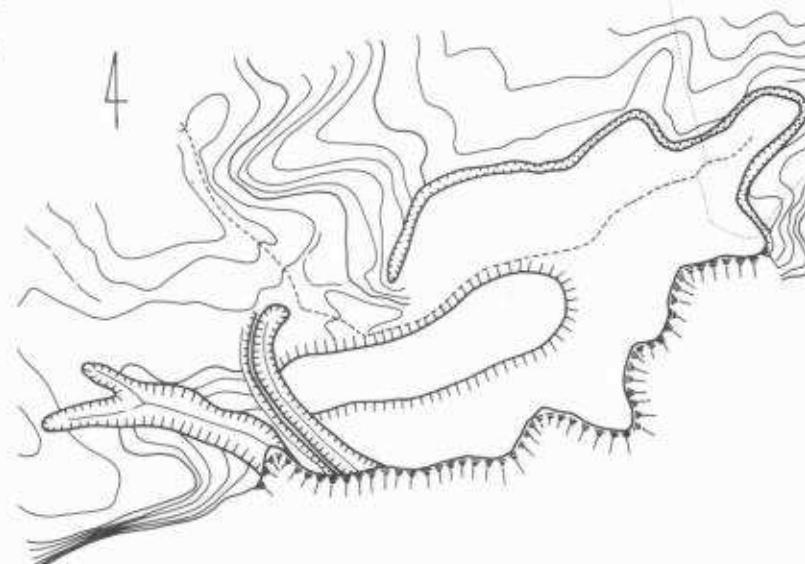
八幡館 胆沢郡金ヶ崎町永栄字九石

段丘が南へやや張り出す、標高90~103mの突端部にある館。規模は東西150m、南北90mで、南寄りに主郭を置き、北へ向って三段築成の平場をもつ。主郭東側に腰郭を有し、さらにその東底部にやや広い平場をもつ。主郭北面に東西方向に土塁が認められる。主郭西方端にこれを限る空濠が南北方向に一部ある。また、その西には土塁がある。前九年の役に源義家が陣屋を設けたという伝承がある。



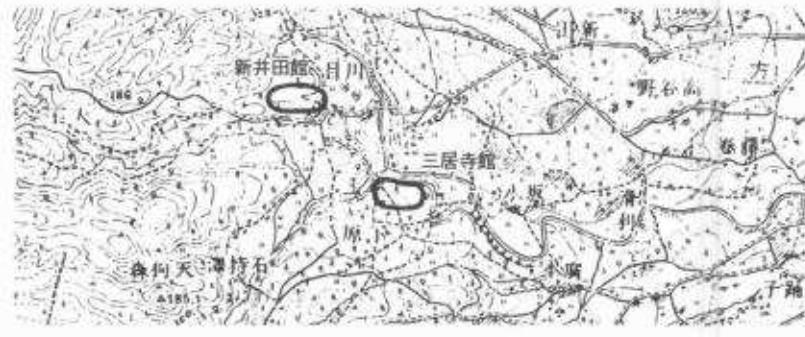
安倍館（通天館） 胆沢郡金ヶ崎町永栄

西根段丘上に立地するが、標高200~220mは山城といえる。東西約400m、南北最大で200mの範囲。眼下に胆沢川を望む。東方約1kmに永徳寺がある。南側は自然地形の崖を利用し、北と東側に幅2m、深さ0.5mの小濠をめぐらし、西側は段丘基部を限るように南北方向に空濠を掘り、さらにその西に土塁を同方向に築く。段丘鞍部の頂上付近を主郭とするか。安倍氏の居城伝承がある。



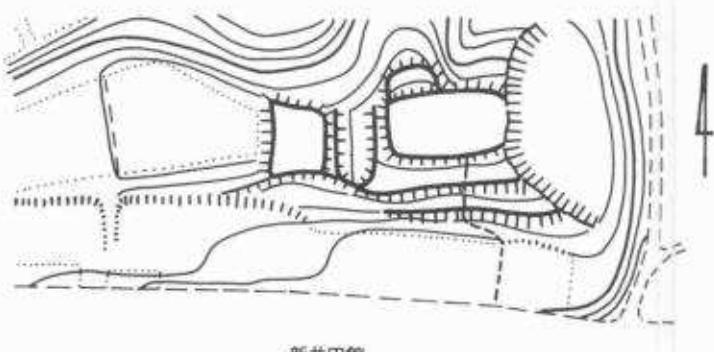
新井田館（八荒神） 胆沢郡金ヶ崎町西根字八荒神

西根段丘突端で東に黒沢川が南流している。標高110～115mあり、西郭と東郭からなる。全体の規模は東西80m、南北50m程度。二つの郭はその間に南北に入る空濠で区切られる。東郭の南面には二段の腰郭が造成され、さらに北面にも小郭がとりついている。郭内に八荒神が祀られている。城主不明。



三居寺館 胆沢郡金ヶ崎町西根字難子沢

胆沢段丘に相当する村崎野中位段丘がここでは顔を出す。標高109m～110mのところにあり、北に黒沢川が沿うように東流する。北面はこの崖面を利用した築城である。西郭と東郭からなり、西郭は約90m四方で、西は小支川で開析された崖面利用、東辺と南辺に空濠を、さらに南辺に土塁を築く。東郭は北面除きの三方に空濠をめぐらし、その内側に三方土塁を築いている。規模は100m四方。東郭南方に駒形神社がある。城主不明。



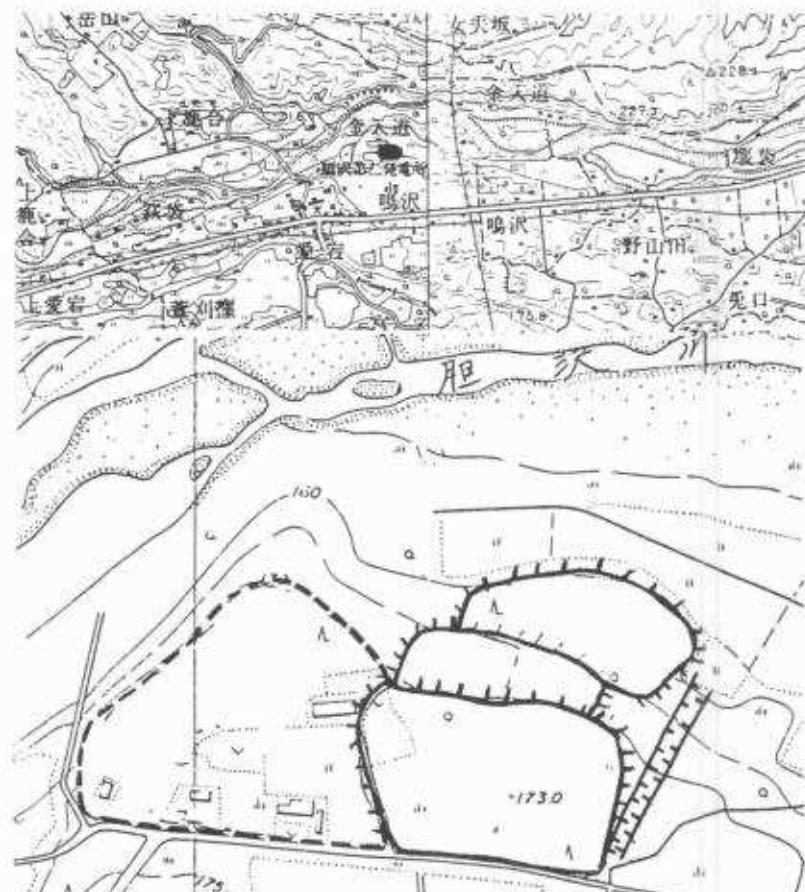
新井田館

門ヶ城 胆沢郡胆沢町若柳字愛宕

胆沢扇状地の上流部分に位置し、主要地方道・横手住田線の北側500mのところにある。愛宕原段丘面の下位に相当し、標高165～173mである。館の北側は胆沢川の段丘崖であるが当館は胆沢川の小蛇行によって生じた段差を郭としてたくみに利用している。

標高173mの平場を東西170m南北100mの主郭として区画、一段下の面に東西120南北50mの郭を設けている。これら三郭の東側にかけては深さ2m、巾2mの濠があったと言われているが、現在は1mほどの規模でかすかに残っている。また、民家の建つ西側の平地も郭の可能性がある。砂利採取場の北側に土壠状の高まりあるが、砂利採取の際の土寄の可能性もあり断定はできない。

築城者、居城者とも不明。築城時期は室町中期頃か。鹿合館の支城（出城）と伝えられている。（胆沢町史）



鹿合館 胆沢郡胆沢町若柳字上鹿合

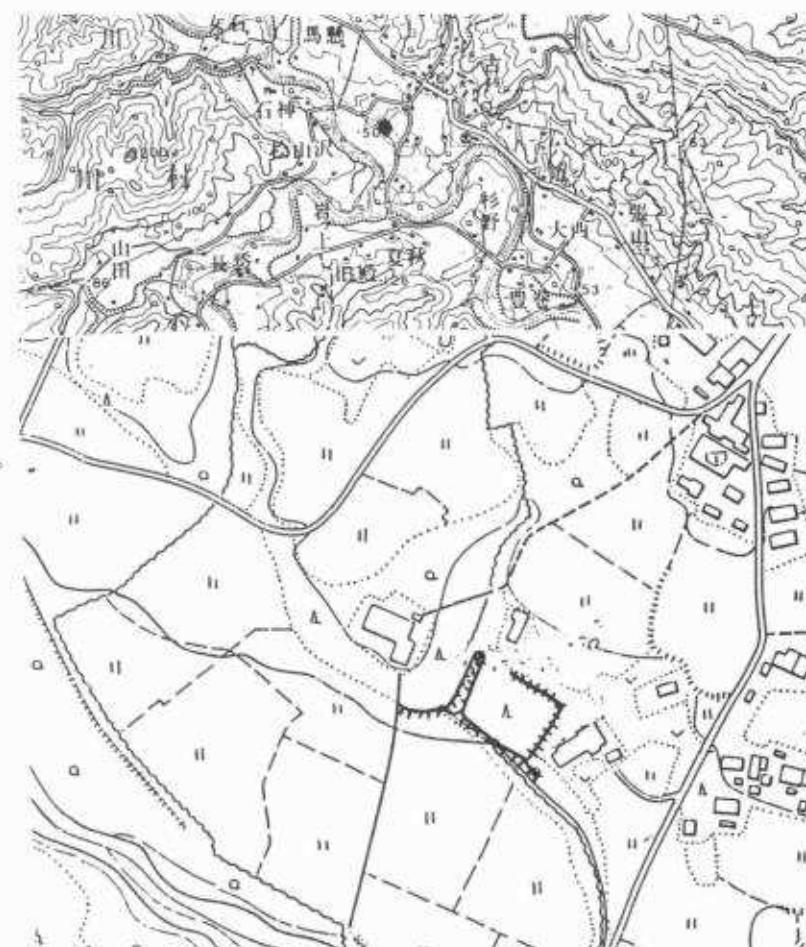
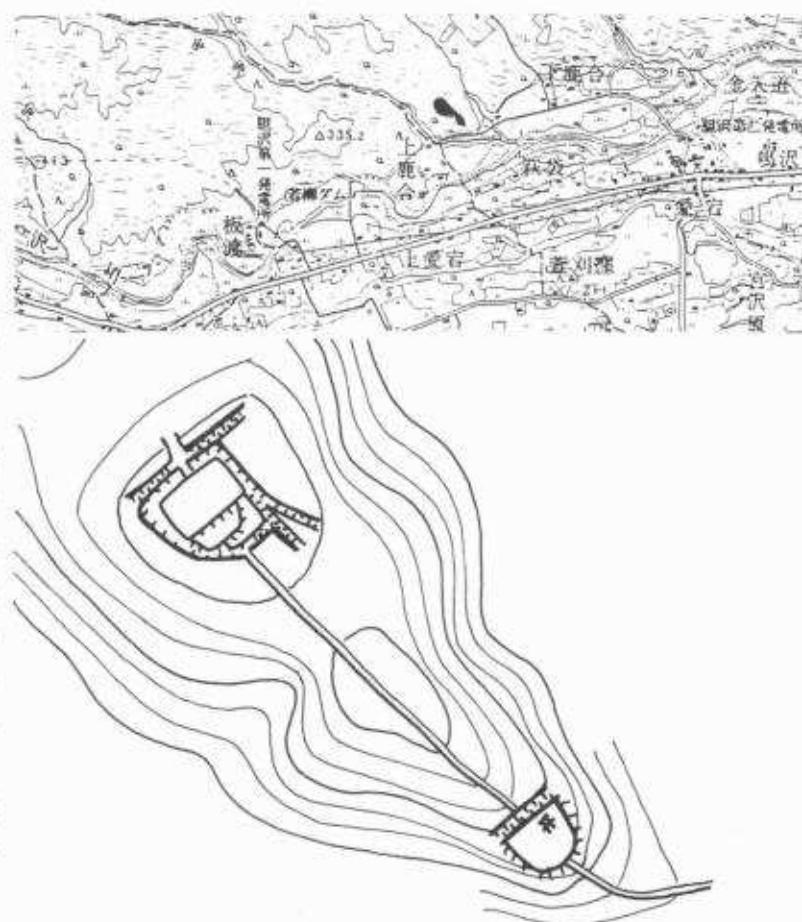
胆沢川北岸の奥羽山脈の支脈山地の頂上に位置しており、胆沢川上流の典型的山城である。標高 273m。山頂の本丸と考えられる郭は東西40m南北24mの規模である。本丸の東西、北に巾25m高さ0.5mの土堀がありその外を堀がめぐっている。この堀は巾7~8mの築研堀で東側で二重になり一つは南側に廻り一つは更に東に延び三の丸東端から急激に落ちる。深さ8~10m。外堀も1mの土堀をはさみ北側のみに存在する。巾3.4m深さ2.3mで西から東に延び東崖で消える。内外堀の境の土堀はほぼ中央で切れている。二の丸は本丸との比高3m、6×30mの規模。三の丸は二の丸との比高3m、2.5×5.3mの規模である。三の丸から道が通じており200m先に40×30m規模の物見台(出郭)がある。北側に土堀と空堀が走っている。

館主は柏山伊勢守明吉(天正年間)の家臣で高橋盛富と伝えられている。南面の山麓は「山居の寺跡」と呼ばれ、当館は「山居館」の異称がある。(胆沢町史)

古館 胆沢郡衣川村上衣川字古戸

北股川北岸の低位段丘上に位置し、衣川役場より南西方向に約1kmのところにある。南側は段丘崖となって急崖で西側には沢が入りこんでいる(水堀の可能性も考えられる)。北側と東側は高さ2.5mの土堀がまわり、北側45m、東側40mをはかる。東側ではこの土堀の外側に巾2mの堀が沿っている。郭の規模は東西100m、南北70m程と推定されるが、開田されていて遺構は不明である。

築城者、居住者、時期等は一切不明である。昔から阿倍貞任の居城であったという言い伝えがある。

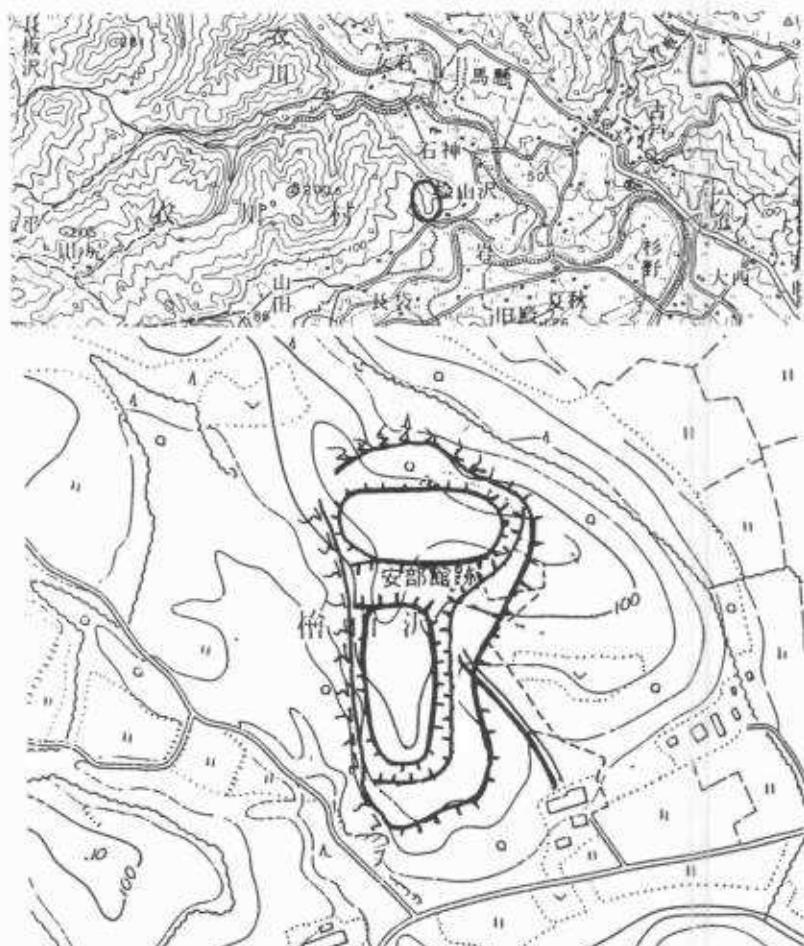


安倍新城 胆沢郡衣川村上衣川字石神

衣川村の中心地から南西に約2km、北股川と南股川にはさまれた西から東にのびる丘陵の先端部に位置している。標高は100mである。南北の二郭からなり、西と北側は急斜面となっている。北と南の郭は空堀で区画され、本丸の北郭は東西120m南北50mの規模で南から東に向けて堀がめぐっている。二の丸の南郭は東西40m南北100mの規模で北、東、南西に堀がめぐっている。西側の急斜面以外は腰郭がめぐっている。本丸と二の丸の間の道は大手口とも推定可能である。

「風土記」によれば「北又の安倍新城・東西130間、南北120」城主は柏山伊勢守があるが、当然詳細については不明である。

(仙台領内古城・館、1)



(六) 西磐井地区概観

西磐井地方は南北約15km東西約43kmと東西にほそながく現在は北上川の東岸の一部を含むが北上川以西の地域である。須川岳（栗駒山）を最高峰として東へ丘陵が延びている。この磐井丘陵を下刻した磐井川や諸河川が東流して北上川に注いでいるが、平野部はこれらの河川沿いに発生している。長期にわたる河川の蛇行が比較的侵食がはたらかなかった部分に小盆地を生じさせさらには断続的に数珠つなぎの盆地状の谷底平野を形成させている。それぞれの平野部は端部が急激に狭くなる橢円形をなしている。

磐井川、太田川、北上川の合流する平野部は沖積平野で増水時に狐禪寺峡谷のため排水仕切れない河水が氾濫して堆積するところから、到るところに自然堤防が発達し、河道の移動にともない蛇行して流れた河道の痕跡を残している。また狐禪寺峡谷を通過した北上川に金流川が合流しているが金流川沿いに生じた平野部が花泉の中心部となっている。

西磐井地方で確認されている遺跡のほとんどは、以上の河川に沿った平野部および段丘面に分布している。

花泉は後期洪積世の獸骨化石とされるハナイスミモリウシの発見で有名であるが、縄文時代の淡水貝塚として貝鳥貝塚があるが全体としては特に河岸段丘上に縄文時代から弥生時代の遺跡が分布している。

西磐井地方の古代史上の事蹟は断片的であまり多くを伝えおらず、8世紀末から9世紀の坂上田村麻呂の東北平定の頃からである。対蝦夷政策のうち宗教による同化政策によって寺社の建立が行われ、一関地方には、配志和神社と舞草神社の延喜式内社が置かれた。また山目には泥田廃寺遺跡が発掘調査によって確認されている。

当時の東北地方の政治中心は、多賀城、胆沢城に集約され、西磐井地方の歴史的記述はあまり残されていないが、当地方の記述が歴史上に現れてくるのは、前九年の役（永承6年～康平5年 [1051～1062]）後三年の役（永保3年～寛治1年 [1083～1087]）などに戦場となった場所などが、文献中の地名等で想定され、不鮮明ながらも歴史が浮きあがってくる。

前九年の役の中心的人物である俘囚の長安部頼良は奥六郡の郡司であったが、その支配地には一族を配置し権勢を誇り最大の時で12の柵が置かれたという。その最大に拡大されたころは衣川を越え磐井に侵入するに至り、中央勢力である源頼義と対戦し、現在の一関市萩荘の磐井川沿いにあったとされる「小松の柵」に安部貞任、宗任兄弟と叔父の良昭が立て籠もったとされる。

しかし安部氏の同属である清原氏が源頼義に寝返ったため遂に安部氏は滅亡して奥六郡は清原氏に移った。

後三年の役は、清原氏の内部抗争から起こり永保3年（1083）源義家が陸奥守として着任してきたのを巻き込み私戦から国司対在地勢力という抗争団に変化したのであるがこの変化を読み取り巧みに源氏勢力と適応した清衡は、その結果奥六郡の継承者となって後の藤原三代の栄華の基礎を築いたのである。

初代清衡同様に二代基衡は陸奥、出羽押領使となり基礎を更に固め三代秀衡にして鎮守府將軍、陸奥守に相次いで任せられ、中央からも認められ、東北の霸者として凡そ100年程平泉の地に仏教都市を築き上げた藤原氏も源氏の総帥源頼朝の前に滅ぼされた。

その後は鎌倉幕府の御家人により管理されるところとなり、その任に付いたのが下総國（千葉県）葛西庄出身の葛西清重であった。これより代々、胆沢、磐井、牡鹿の三郡を中心に周辺勢力とのあつれきや内紛を繰り返しながらも奥州仕置までの凡そ400年の間、葛西氏の支配が続いた。

平泉は藤原氏という盟主を失って幕府に保護されたとはいえ以後嘉祐2年（1226）毛越寺、建武4年（1337）中尊寺の火災等があり藤原仏教文化の遺産と化していった。

西磐井地方の直接の領地支配を行ったのは葛西氏家臣團が分知され、その系団や伝えられる由来等は遡ると葛西氏にたどりつくのが多く見られるが古い時代については極めて不明瞭な部分を待っている。しかし領國支配の堅持のためには葛西氏との姻戚関係等を持ち続けることによって、それぞれの支配地に権勢を振るっていたことは想像に難くない。

一関地方では古くから萩荘黒沢村を中心として黒沢氏が領地經營に参画している。また文治5年（1189）には藤原泰衡追罰の際の軍功が認められ山目、中里村、増沢郷を与えられた小野寺氏も当地での存在を記録している。

その他一関地方に割換した豪族については南北朝期には嚴美端山に佐藤氏の存在が伝えられている。

室町期になると出羽、奥羽は関東管領の統治下に入り、足利一族の石塔、畠山、吉良、石橋、大崎氏などが着任して奥州を分けて治安に当たった。所謂奥州探題であり、その中心は大崎氏で、奥州の大名は一應探題の配下に入るわけだが在地の大名勢力との秩序を保つことは困難であった。

葛西領の南は大崎領と接しており14世紀後半から既に両者間であつれきがあり、ことに文明4年（1472）大崎教兼が西磐井郡流庄油田に侵入するが葛西朝信が撃退する。こ

のころから葛西、大崎の領地問題で紛争が拡大し戦国時代末期まで続いている。

葛西氏と伊達氏は姻戚関係を結び柔軟策をとり、領地安堵のために腐心している。

天文3年（1534）大崎領内に内乱が起こり、この影響で葛西氏北辺の柏山氏は南部氏の南侵を受けたが撃退する。そしてこの時期に柏山氏に寄食していた小岩一族は、戦功をあげる機会を得てその武勇を發揮して認められるところとなり南側から侵攻してくる大崎氏の対策として、市野々村を中心とする萩荘西半に移封されたのである。

天文13年（1544）葛西、伊達、大崎の三氏は一時和睦するのだがそう長くは続かなかった。

そのころまで一関地方では中心的な立場にあった黒沢氏は徐々に小岩氏の台頭にとって替わることになっていった。

このころ葛西氏と大崎氏をめぐる情勢は和睦、抗争と変化が著しく、特に花泉流地方に接した地域が常にくすぶり続けている。

流郷の葛西氏族臣は奥州征伐直後から支配していた中村氏、薄衣氏の一族である金沢氏が加わり、本吉郡からは清水氏。その後桃生郡から寺崎氏の支族が岬城を本拠とし、その他奈良坂氏があり、戦国時代の終末期にはこれらの氏族は対決に終始する。この中にあって寺崎氏が中心的な存在であった。

元亀2年（1571）3月大崎義隆は葛西領の流郷に侵入した。この時葛西晴信は流郷大門仁王ヶ原で撃退するが、これを機に一触即発の状況となり、同年7月大崎氏と葛西氏が佐沼地方で衝突、元亀3年には葛西氏は西磐井の諸将を動員し大崎領を侵略し、天正元年には、有賀村、金成村を攻略した。

天正5年には、三迫より佐沼に至る線の北方は葛西氏が支配するところとなる。しかし下克上の時勢は葛西領内にも高まり葛西晴信は領内経営で精一杯の状態であった。一方領内の動きとは異なって全国的に統一の気運が高まり支配関係の再編成が行われて行くなかでその要となっている豊臣秀吉から全国の大名へ小田原攻め参陣の要請があった。これは豊臣氏への従属か抵抗かを選択させるものであったが、内紛の続発から葛西晴信は大崎氏同様小田原攻略に参陣出来ず、豊臣氏に従属の機会を逸してしまい天正18年（1590）奥州仕置のため領地を剥奪されてしまった。

葛西、大崎領は軽輩の木村伊勢守に移ったが、領内に一揆が起こり木村氏は孤立してしまう事態に陥ってしまった。その收拾のため秀吉の裁断により領地の再編成が行われ、それまでの伊達領の会津近辺5郡と旧葛西、大崎領を交換

し一揆を平定し伊達領とすることとなり、慶長9年（1604）一関地方は伊達氏の一門格の留守氏が分封配置された。

天正19年（1604）茂庭綱元は柴田郡沼辺から磐井郡赤荻に所替えとなり12ヶ年の在住であった。

その後伊達政宗の十男の伊達兵部宗勝に替わったが、寛文事件により兵部は失脚、土佐国に配流となった。以後伊達氏の庶流にあたる田村宗則の子田村建顕が岩沼より一関に入部し3万石の藩主となった。

田村氏は伊達氏より分知された支藩であったが、幕府の直参として武士支配の封が解けるまで十一代にわたり継承された。

西磐井地方に確認されている城館跡は伝承等によると安倍氏時代と葛西氏時代とに分けられる。

安倍氏関連の事蹟は「吾妻鑑」に載っているが地名等に当時の活動を推測させる程度であるが正確な位置等は分からぬ状況である。

葛西氏の支配下にあった往時の直接的な史資料が少なく、後世に記録している風土記諸系図が事蹟を伝えているが不明瞭な部分もあり詳細な検討が必要であるが歴史的事実を概ね記録しているものと考えられる。

いずれにしても抗争の上に滅亡し自ら後世にその事蹟を残せなかったもので、後伝の記録や口承によるもので確固な裏付けに乏しく全体に推測の域を出ない状況である。

城館の配置は領地經營上、軍略上の配慮から構築したのであるが、当地の場合も分水嶺や河川を境として区画される地域を単位とした支配地の確立がなされ、時代の趨勢とともに変化したものであるがその意味で萩荘の小岩氏はその勢力を確実に拡大せしめその領域は小岩一族の支城の分布に見られ、西磐井の中でかなり強力な存在となつて行つたことが知れる。

城館の構築はその始どが自然地形を利用したものでその選地については丘陵先端部と河川の移動に伴い独立した段丘上に構築されるものに大別される。

一関城 一関市字釣山

一関藩の藩校である文武館の初代学頭の関 元龍が著した『関邑略志』には「……構築基壇数百間これを詳らかにするときは忌諱を侵す故に略す」とし、釣山にある城の状況は明らかにはしていない。また同著は、釣山について大同中田村麻呂が高崎城を営み、後安倍貞任の弟家任、さらには源 賴義、義家父子が陣を置いたこと、天正年中には葛西氏配下の小野寺伊賀藤原道照が居住の記述している。

この釣山にあった城についての事蹟は不明な点が多いが中世末の一関城の記述は、後伝ながらも伝えられているがそれを更に遡ることは、現在のところ裏付ける資料が皆無で困難である。

また、近年公園整備に係る発掘調査が行なわれた際に、狭い面積ではあったが、柱穴等の検出面から「開元通宝」「天聖元宝」、印花文を施した美濃焼の皿の破片などを検出しておらず、中世一関城の存在は確実である。その範囲は現在釣山と呼ばれる北側に突出した丘陵端部を中心とした南北450m前後、東西400m前後に及ぶものと考えられる。

本丸は、千疊敷と呼ばれ標高90m前後で100m×50m前後のほぼ長方形を呈する。本丸と同一のレベルに続く丘陵基部には、現在一ヶ所空堀が認められるが、他方本丸以下には適度な落差があり、階段状の郭が配されている状況である。

千疊敷の北東隅には虎口があり、下方の平場と連絡している。南東隅には、方形の若干の高まりのある部分があり矢倉等の施設の存在が想起させられる。また、西側には小山があり、脇に田村神社が置かれている。この小山は、烽火台と伝えられている。

一関城に小野寺伊賀道照が移封されたのは、葛西氏が領内再編成を企て、本拠地を現在の石巻市から登米町に移した際に、すでに登米に居た小野寺氏を一間に移したものとされている。

一関城の周辺は、東側に磐井川が北流し、途中で東に折れて北上川に注いでいる。これ等河川沿いに発達した平野部は、一関地方では最も広く、その中心的な位置にあって平野部の殆んどを眼下におきめることができる場所である。また、東側には吸川が北流して磐井川と合流しており、これら河川を天然の水堀に見立てて惣構と成したものであろうか。

近世以降一関は、この一関城の立地した釣山の裾を中心として都市化が進み現在に至るも、その変化は進行中である。

葛西氏が滅亡し、旧領は一時木村氏に移ったが、後伊達氏に移った。

慶長9年、伊達一門格の留守政景を一関地方に所替えとし、一関城東北麓に居館を設置したとされる。

慶長年中には、仙台藩によって従来からの岩ヶ崎、萩荘赤萩、平泉を通る官道から奥州街道へと整備され、以後奥州街道を中心とした街場が発達して行くのである。奥州街道が願成寺前を通り、大町に接続。途中西に折れて地主町となる現在の基本線が形成される。一関の町並みは、これを契機として発達したもので、その意味で留守氏の時期に町並みの骨組みができあがったといえる。

寛文年中には、伊達政宗の10男伊達兵部宗勝が一関地方を領したが、原田甲斐の刃傷事件により兵部は土佐国へ配流となった。その後、天和2年田村建顕が岩沼から一関へ移封となり、以後明治維新まで田村氏11代の藩主が一関を藩府として継承した。

一関藩田村氏としての町割を行い、現在の一関の町並みの基礎を築いたのは一関藩初代建顕で、貞享3年老中阿部豊後守に居館築造に際し絵図面を提出し返還されているがそれによると釣山の東側に藩主居館を水濠をめぐらし、周辺に侍屋敷が配されている。

一関藩初代藩主田村建顕は、一関入部4年過た頃の貞享3年には、一関藩としての居館の築造に係っていたようである。

当然のことながら、居館を築造するということで絵図面を添えて幕府に届出たが、ときの老中阿部豊後守から城の構に見えないようにという注意が与えられ、築造されたようである。

実際に居館やその周辺がどのように整備されたのか、直後の状況を知ることのできる資料がないので、どの程度のものか分からぬが、慶応年中に書かれた「一関家中屋敷絵図」によると居館は水濠がめぐらされ、土手が巡り、出入口門が構築され、杉が植えられていたようである。居館の周辺には侍屋敷があり、町家や下級の侍屋敷との間にはごけん堀が外側から居館を囲む形となっており、内側を内家中、外側を外家中と呼んでいる。このごけん堀に沿った大町に接する場所に樹形門が設けられ大手門となっている。また、地主町に接する所では裏大手が設けられ、すじ向いに御本陣がある。これ等の他に奥州街道の入口に当る願成寺前、表吸川小路南端、桜小路南端のそれぞれに樹形が設けられていたとされる。寺院は町割の外側に寄せられていて、特に藩主に係りのある寺院は釣山（館山）の丘陵続きの東縁部に所在する。

大町と地主町を基本的な通りとしているが、それ等に平行する形で通りを設けられており、その通りをつなぐ横丁

は鍵形になっている。

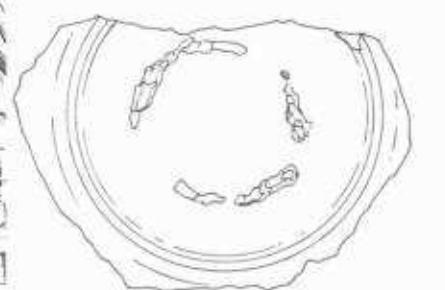
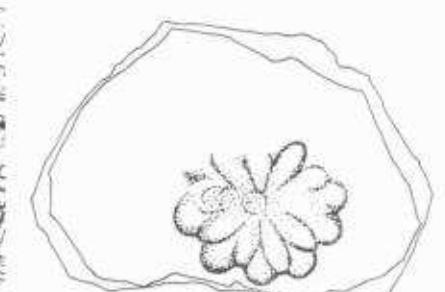
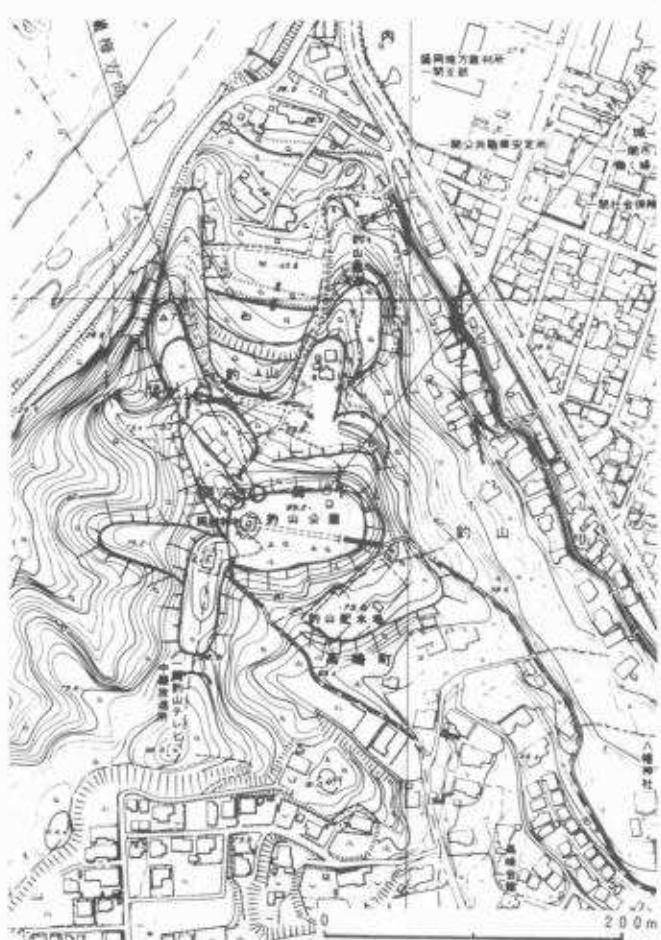
これ等の町割の構造は、防禦施設をかなり盛り込んだもので、概観すると城下町として作られた町といえる。

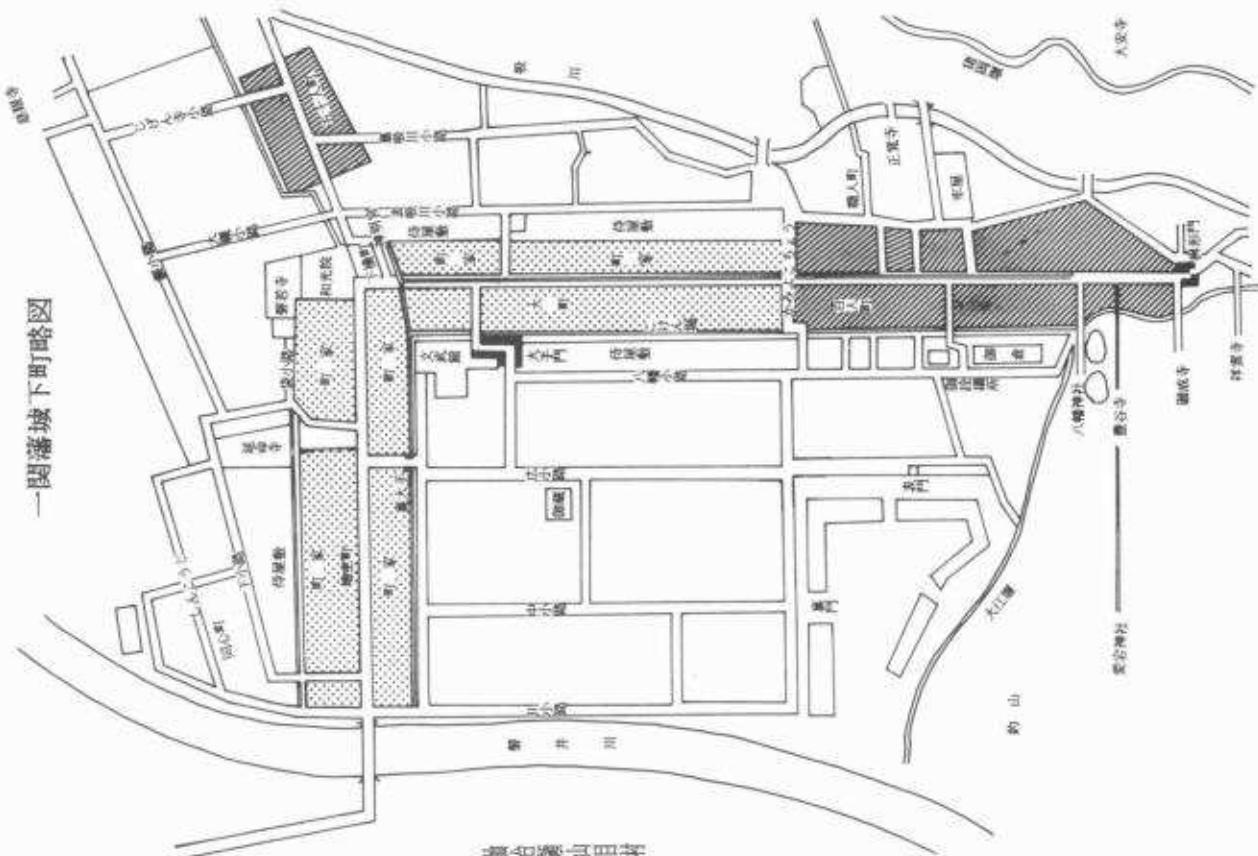
一国一城制ということから本藩青葉城をもって定数を限られているが、伊達支藩ながら幕府直参、大名格としての町割である。

釣山を詰城と見立て築に居館を置き、水濠を二重に巡らして、道を鍵形に要衝を拠形に攻守に配慮し、町割の限界が磐井川と吸川との間に限られるのも、これ等の河川を懸構として防衛線を設定したもので、基本的な考え方としては、中世一関城の発展形と考えられる。



一関城跡より出土の遺物





釣尾城 一関市萩荘字下本郷

市野々川に沿い、市野々平野の南側の丘陵に立地する。周辺には、釣尾城を本拠地とした小岩氏の系列に属する諸城が所在している。

東側へ延びる丘陵の先端部、標高120m前後の平場を中心として取り囲むようにして帯郭があり、場所によっては、さらに半島状に延びる端部については空堀によって区画し、階段上に連郭式としている。西側の基部は、上部で幅30m前後と極めて狭くなっており、空堀を4ヶ所設けている。

本城の範囲は、東西600m前後南北400m前後となっているが、周辺に支城をかかえ、最大では小岩氏系支配の域館は、北5km、南4km、東11km、西は不明に及ぶ範囲に支城を作った。

釣尾城の南側裾には、荒屋敷、殿屋敷という屋号を持つ所があり、支配の中心的な城としての性格がうかがえる。「古城書上」、「風土記」に天正年間小岩孫三郎の居城と伝えており、古記に孫三郎源信定は小岩の本家と伝えている。小岩系図によると天正19年に葛西、大崎一揆の物頭の一人として謀殺されている。



加持屋館 一関市萩荘字上本郷

市野々川流域に形成された谷底平野に接する東側に延びる丘陵に立地しており、半島状の地形を連郭式に区画している。標高130mにある平場が最も広く70m×100m程度で、以下階段状に先端部に向って郭が配されている。

北側縁辺部は急激な崖となり、比較的緩やかな南側は帯郭を2段に設け、段差を明確にしている。直線上に配した郭間で、落差の少ない場所には空堀を設けている。基部側には幅5m～6m程度の空堀2本によって区画している。この館の全体の規模は、東西400m余り、南北300m前後にわたるものである。この館主は、当初菅原長門と伝えられるが、後に小岩氏の勢力拡大とともに追い出され、小岩弥太郎の居する所となつたとしている。この館が接する平野部は、小岩氏の本拠地となつた場所であり、この館の反対側(南側)には小岩氏の本城釣尾城があり、またこの平野部を取り囲むように天城城、上沖館、小山館等がある。この加持屋館は、その中で釣尾城に次ぐ規模と内容を持つものと考える。

半目館 一関市巣美町字下松

国道342号線と蛇行する磐井川との間に位置する場所に半目館跡が伝えられている。

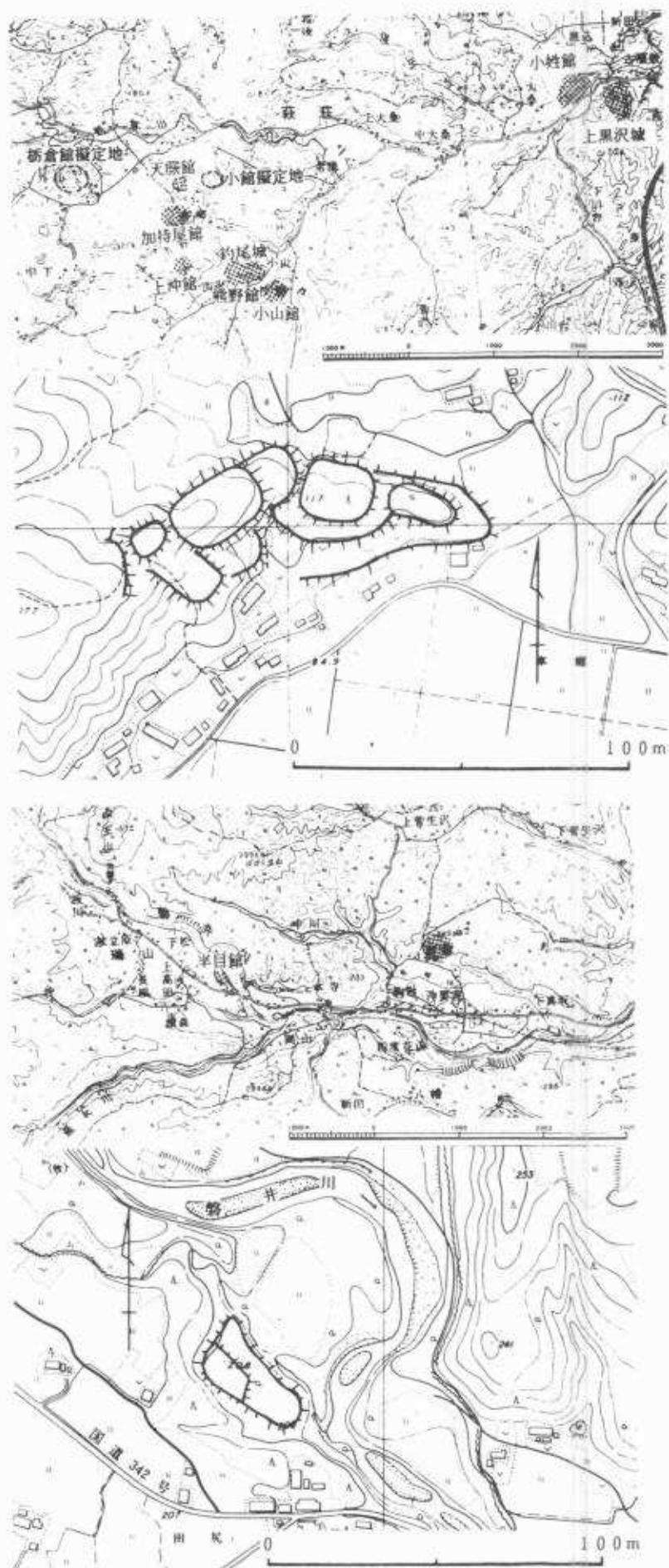
磐井川は半目館の北側を流れ、ちょうど館の東で合流する小河川が館の西側から南縁を流れしており、これが天然の水堀となる。

周辺を観ると磐井川によって形成された谷底平野となっており、この館はこの平野部と同一レベルにあるが、水面との比高差は約10mである。その意味から平地占地の館である。

この館の範囲は長軸方向で130m前後、短軸方向で50m前後の不整長方形といったところであり、4分の1くらいの面積で東隅を中心として1m程度高くなつた平場がある。

また、館の縁辺部に部分的には認められないが、一巡していた可能性のある土壙状の高まりがある。

館主は不明であるが、川沿の北面の一角に温泉があったとされ保養地として利用されたという。一関地方の西の限界にある館であるが、積極的な軍事的目的をもつた所であるかどうか疑問ではある。



赤萩城

東西に延びる磐井丘陵の南縁に小支谷により形成された半島状の丘陵があり。その延長方向は南東側に向いており、その両側は極めて急激に落ち込む崖となっている。

丘陵を独立させる空堀が基部に認められるが、崩壊し旧状を残していない部分がある。

標高110m前後の平場を頂点として、階段状に郭が配されているが、中間に空堀があり、空堀の底部は平らで箱堀或いは箱薙研堀の可能性がある。

郭毎の大きさはまちまちで規則性を感じないが、半島状丘陵の地形が直線連郭式としている。

城主は「葛西真記録」に岩瀬壹岐守経道、「岩手県管轄地誌」「古城書上」「風土記」に小岩大膳重光（友光）としている。

赤萩の平野部のほぼ中央に位置し、沿線に所在する城館中最も大きく遺構も明瞭に遺っている。

戦国時代末期の勢力分布から小岩一族の属城と考えられる。

中里城 一関市山目字中里

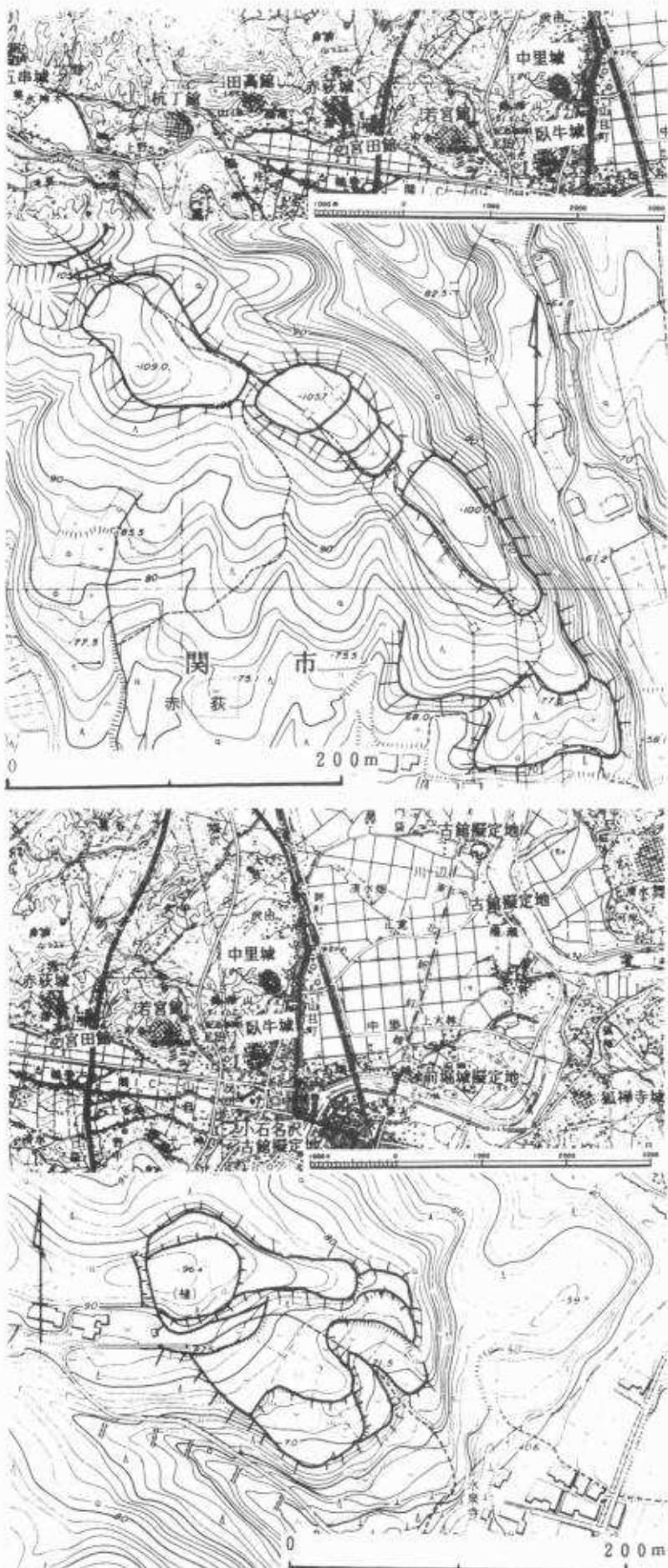
永泉寺の背後の丘陵上の標高96m前後の平場を中心として階段状に平場が認められる。丘陵頂部の平場は45m×50mで基部側に幅3～5mの空堀が認められ、現状での深さはおよそ1.5mで丘陵を区画する形で設定されている。さらに130m程奥に行くと明確ではないが凹んだ部分があり、空堀である可能性もある。

この城の南側の土砂くずれにより、一部はすでに旧状を失っている。

裾部との比高差は50m余りで、南北側面は急激な崖となっている。

城への入口は永泉寺の裏から登る道路が考えられる。この城としての機能を持った部分は、直径200mの範囲と考えられる。

「風土記」には、小野寺修理、佐藤紀伊守の居を伝えているが、はじめて葛西氏が奥州総奉行として任に着く時期より、小野寺氏が中里の地に居り従属したとされており、以来その地にあったと考えられる。



三間城 一関市三間字白崎

一関駅から東へ1.3kmの平野部に沿った丘陵上に立地する。北東方向に延びる丘陵縁辺部の小支谷により形成された平面三角形のおよそ250~300mの範囲の丘陵の狭くなった丘陵基部に防禦施設を設け、城として独立性を保っている。

この立地する丘陵の周辺は、急激な崖となっている。

三角形の中心にあたる標高78.5mに40m×60mの最も大きな郭があり、それを軸として三方の丘陵線上に郭が設けられ、落差のある所は階段に、落差のない所は空堀によって区切り、さらに中腹付近にも帯郭を配している。

基部にみられる遺構としては、土塁、空堀土橋と考えられる部分がある。

裾部は標高25mで、本丸との比高はおよそ50mである。形としては、極めて良く整った遺存状況の良好な城である。

城主は、「風土記」に千葉内膳、「古城書上」に千葉五郎三郎、「葛西真記録」に二ノ関平蔵とある。葛西氏の属臣と考えられるが、具体的な事蹟は伝えられていない。

下黒沢城 一関市萩荘字山崎

磐井川、久保川の合流する萩荘地方の最も広い平野部に接する東西に延びる丘陵上に所在する。

浸蝕谷により形成された半島状の基部を幅約7m深さ現況で約5mの空堀によって分断して丘陵を独立させている。

この丘陵の最も高い標高130m前後の地域が、この城の中心部と考えられ、「V」字形の平場とその囲まれた緩斜面に2~4段の階段状の平場がある。頂部を中心とした平場はは200m四方にあり、西側標高90m付近に空堀が認められ、更に西に丘陵は延びており本城の範囲はこの先端までおよぶ可能性があるが旧状を失っている。

葛西氏の奥州経営の当初よりこの地で族臣としてその任に当たったとも伝えられ、黒沢氏はその地名によるとされている。

萩荘の地は古くから開けた土地で一関地方の平野部としては、北上川沿いの氾濫常襲地より安定した所で、当初この地に本拠地を求めたのは当然といえる。



上黒沢城 一関市萩荘字上黒沢

磐井川、久保川が東流する萩荘、赤萩の平野部に接し、北側に突き出た丘陵上に立地する。

萩荘公民館の西側にある標高110mの丘陵の頂部平坦面南北150m前後、東西60m前後の平場を中心に帯郭が二重に巡っている。北、東西の丘陵縁辺部は急激な斜面となり、南側は標高110m～120mのまま続いて行くために、丘陵の幅の狭くなる箇所で空堀によって先端部分を独立させていて、基部側から薬研堀、箱薬研堀を設けている。上黒沢城の東裾には、館下と言う地名が残っており、登り口があり大手口と呼ばれている。ここから登る道路は途中鎌形に折れ曲がっているが中腹辺りからなくなってしまう。

萩荘、赤萩の平野部から小岩氏の本拠地である市野々への出入口となる場所であり、北西に対峙する小姓館とともに要衝を制していたと考えられる。

城主は、「風土記」「古城書上」に小岩越中守を伝えている。

要害城 一関市真栄字内ノ目

国道4号線を挟んで西に的場館、東に要害城が対峙しているが、両者とも往時小岩氏系列の城である。要害城の立地する丘陵は東北新幹線真栄トンネルが貫いているが、中心的な施設からは離れている。北に突出した丘陵の標高110mで50m×70mのほぼ直方形の主郭を中心として、南北方向に連郭となる。主郭と周辺の平場に大きな落差がないこともあって、主郭を中心として土壘、空堀が一巡している。その他には、基部を分断する空堀が2本設けられ、先端部方向には主郭を巡る空堀が堀底道となり、先端部の丘陵を区画する空堀にまで達している。この周辺には、牧田、荒屋敷等の地名がみられ、一定の時間城経営或いは周辺の支配に係ったと考えられる。

遺構の遺存状況は良好な部類に入る。要害城は、北西脇にある的場館と深い係りを持ったものと考えられるが、前述の小岩氏支配下以外の事蹟は知るすべがない。要害城の表面上の遺構の範囲としては、およそ南北300m、東西150mに認められる。



牧沢城 一関市真柴字細田

一関流通団地の南に突き出た丘陵上に立地しており、2つの隣あわせの丘陵に遺構を観察でき、西側の丘陵は標高104mの先端部の南北50m、東西30m前後の範囲に丘陵線上を連続に区画している。一方この東北に隣接する丘陵上にも郭を直線連郭式に区画しており、標高110mの基部から先端にかけて約150m幅50m程度で、西側の遺構と比べて4倍以上の面積である。この丘陵基部の一部の発掘調査を行っているが、空堀と土塁を確認しただけでその他の遺構、遺物は検出できなかった。両方の丘陵も基部が平坦に統いていく地形であることから、空堀と土塁によって独立させている。

牧沢城は、小岩氏配下にあって、元亀2年に花泉の流郷に侵攻してきた大崎氏の動静に對して臨時に構築したものである。牧沢城は小岩氏の支城としての防衛線であり、葛西氏家臣として後詰の任をもつたものであろう。



楊生城 一関市弥栄字沼畑

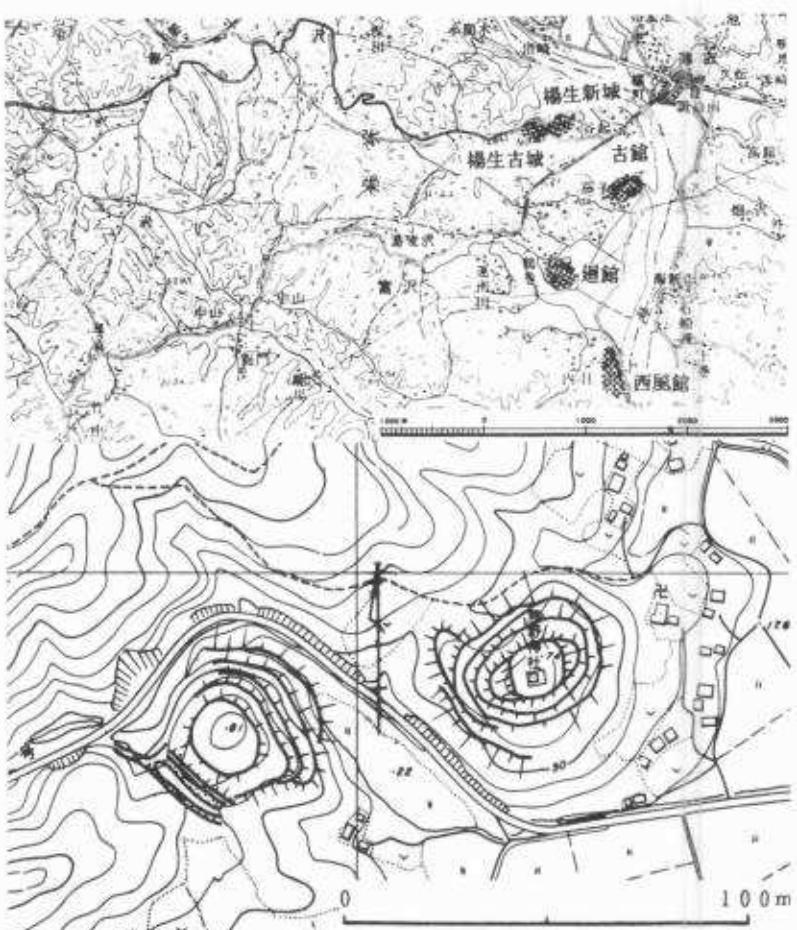
国道284号線を挟んで、弥栄地方に所在する城館5ヶ所の内の、互いに係りの深い隣り合せの城として楊生古城と新城が存在する。

国道を離れて西側にあるのが楊生古城、東側が楊生新城である。

両者とも裾部まで含めると、約200m前後の範囲におさまる程度の圍郭式の城である。

古城は、東へ延びた丘陵の突出部を2本の空堀で区切ったもの、新城は独立丘陵で、両者とも丘陵側面は急激な崖である。

弥栄地域は、北上川沿いの平野部に位置し水運等の経過地点として重要な場所で。周辺の城主の伝えは、藤沢岩渕氏であつたり薄衣氏系とされている。当地は往時流郷の一部でもあって、ことに楊生城は、花泉岬城寺崎千葉氏の岐れと伝えられていて、葛西氏本城寺池城との経路確保の任を負うものであったか岬城千葉氏は大崎氏領に接し、時折接触があるなかで交通の要衝を制していたことは知られるところではある。



小屋館 一関市舞川字中入

県道一関大東線に接した東側に延びる丘陵端部を中心に所在する。小屋館の北側裾部を橋本川が東流し、丘陵先端部裾で南流し半ば匯む形となる。これが、小屋館の恣構であろう。

小屋館と地元で呼ばれる場所は、相川小学校前から南側に向う丘陵を分断する山道があるが、およそその線から東側丘陵全体であり東西400m前後、南北300m前後に及ぶ範囲である。標高150m～160mの平場を空堀と土塁によって3箇所を切っており、傾斜の緩やかな東側と南側は階段上に平場が配されている。

館主は、小屋野勇闘と伝えるものと、石川冠者源義房とする伝えがある。この地域に影響力のあったと考えられる近辺の勢力は、長坂の千葉氏であるが不明である。

小屋館は相川地域の集落の中心にあり、遺構の遺存状況は良く、近辺の城館と比べてもその範囲は広く、この地域の支配の上で重要な役割を果たしたことはうかがい知ることができる。

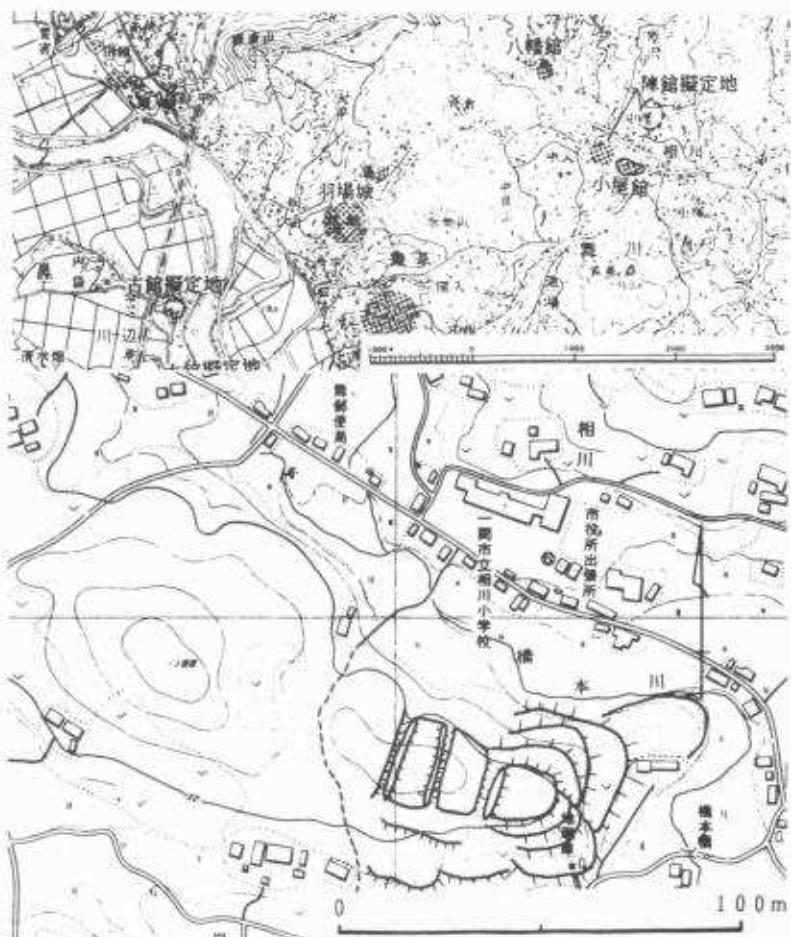
長部城 西磐井郡平泉町長島字滝ノ沢

平泉駅から北東へ直線距離で約3.5km北上川の東側の丘陵上に立地している。西側に突出した丘陵の標高130m前後の平場を中心に階段状に平場があり、3ヶ所の郭からなる。

基部側に空堀があり比較的傾斜の緩い北側にも空堀が三重に認められ、土塁は空堀と一体となり北と東に配されている。城主は葛西氏家臣、長部兵部太夫と「風土記」にあり、「葛西真記録」の葛西御家臣衆座列に詰衆一家として長部長門守、居城平泉長部となっている。長部城の周辺にも葛西家臣の城館が同様な選地で所在しているが、長部城がこの地方で構え、規模において圧倒している。

天正9年には狐禪寺騒動があり、同じ葛西家臣である黒沢氏との確執を伝えている。

葛西領内の統率力の低下が表面化した一例である。天正19年には葛西、大崎一揆の関係者として伊達氏の謀殺に伏した一人に、長部中館城主として千葉式部太夫胤資がいる。



安土城 西磐井郡平泉町平泉字要害

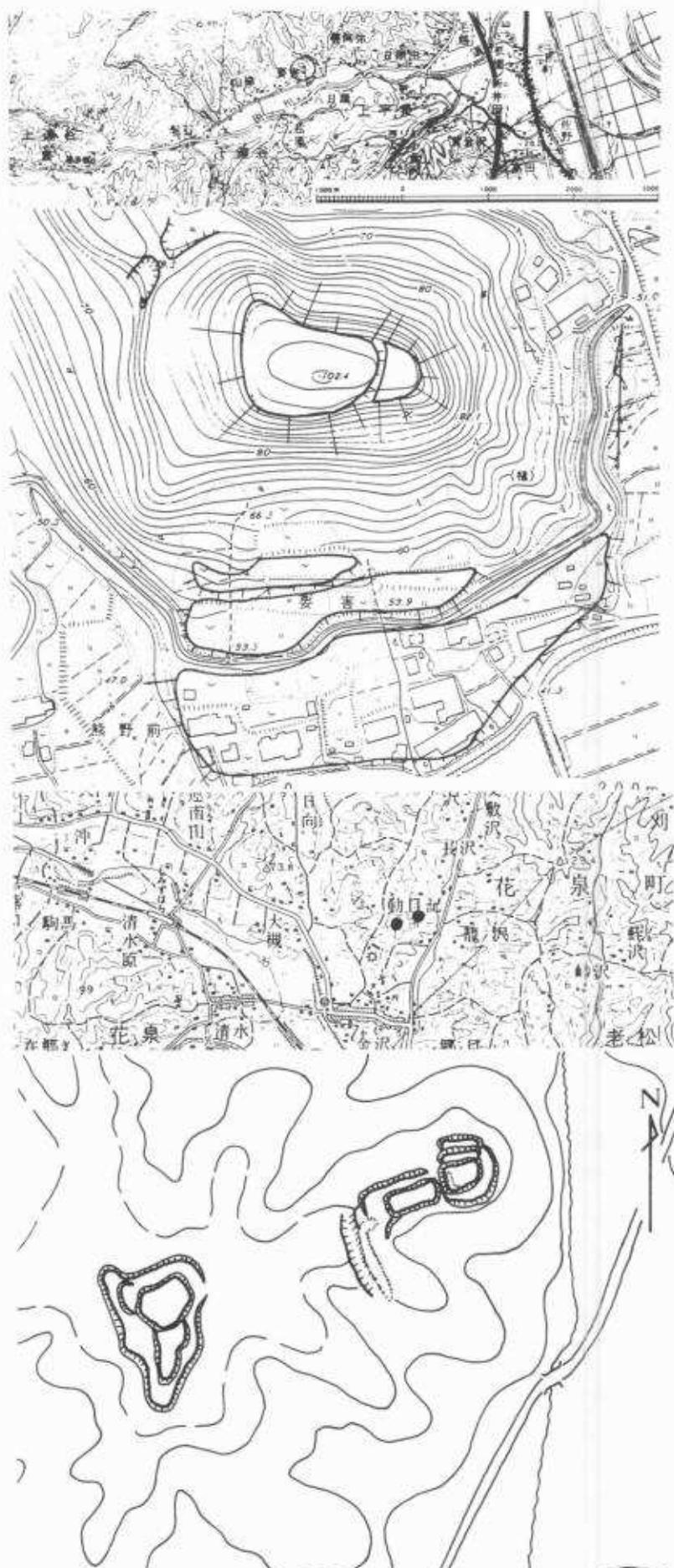
毛越寺から西南西へ約2km、達谷窟からは東北東へ3km弱の位置にあり太田川沿いに開けた平野部に接する丘陵上に立地する。

小支谷により形成された半島状の丘陵先端部の標高100m前後の頂部平坦面が本丸であり東西約80m南北約50mの規模で下位に腰郭が認められ、南側裾部の民家のある場所は周囲と比べ高くなつていて往時の居住地域である可能性がある。

丘陵の基部、狭くくびれる場所を利用した空堀が認められ、これによって城として独立させている。

城主は「風土記」に葛西家臣安土日向守、「古城書上」には升沢摶津守とある。

また、安土城から、直線距離で、東南東約4kmにある敵美の五串城について城主千葉八右衛門平泉安土之升沢摶津孫としてあり、升沢氏は本拠を阿土城として、五串城に升沢氏の孫を分けたようである。



朝日館 西磐井郡花泉町金沢字西川

金沢の町並みの北東約1.3km、東の内沢川の谷地と西に有馬川の平地によって挟まれた丘陵上にある。館は大きく標高約75mの愛宕山の頂部と、その東方に張り出した丘陵上とに区分できる。

愛宕山の方は出郭と考えられ、愛宕社が鎮座する平場(40×38m)と、南へ延びる細長い郭(23×43m)、そしてこれらを取り巻く腰郭からなる。

愛宕山の東方約150mの居館部は、東端に主郭が位置し、東面は内沢方向へ急な崖となる。主郭南北面に腰郭、主郭西端に土塁を築き、この郭との間は空堀状の沢がある。この郭の西には幅5m長さ50mの鉤形の土塁が南北に走りその外側には空堀がみられる。この空堀は二の郭北面にまわり腰郭となる。また南側も腰郭状の段となり、沢面へ落ち込む。

「風土記書出」には藤原秀衡家臣金沢伊豆守、「古城書上」では同名で葛西家臣と伝える。

紫館 西磐井郡花泉町涌津字館

花泉駅から南東に走る国道342号線が、涌津新町で直角に折れ、涌津の町並みに入る。館はこの涌津新町の西方、標高約50mの丘陵上に位置する。

主郭は館跡の南東部、館明神社の境内で、その北側に南北約58m、東西約21mの平場があり、二の郭と思われる。これらの東から北東にかけ腰郭がまわり、さらにその下にも腰郭状の小平場が付き、最下部に水濠の跡がある。主郭の東端から南端にかけ低い土壘があり、その下に空堀が走る。また二の郭の北端にも四角形の櫓台と思われる平場がある。

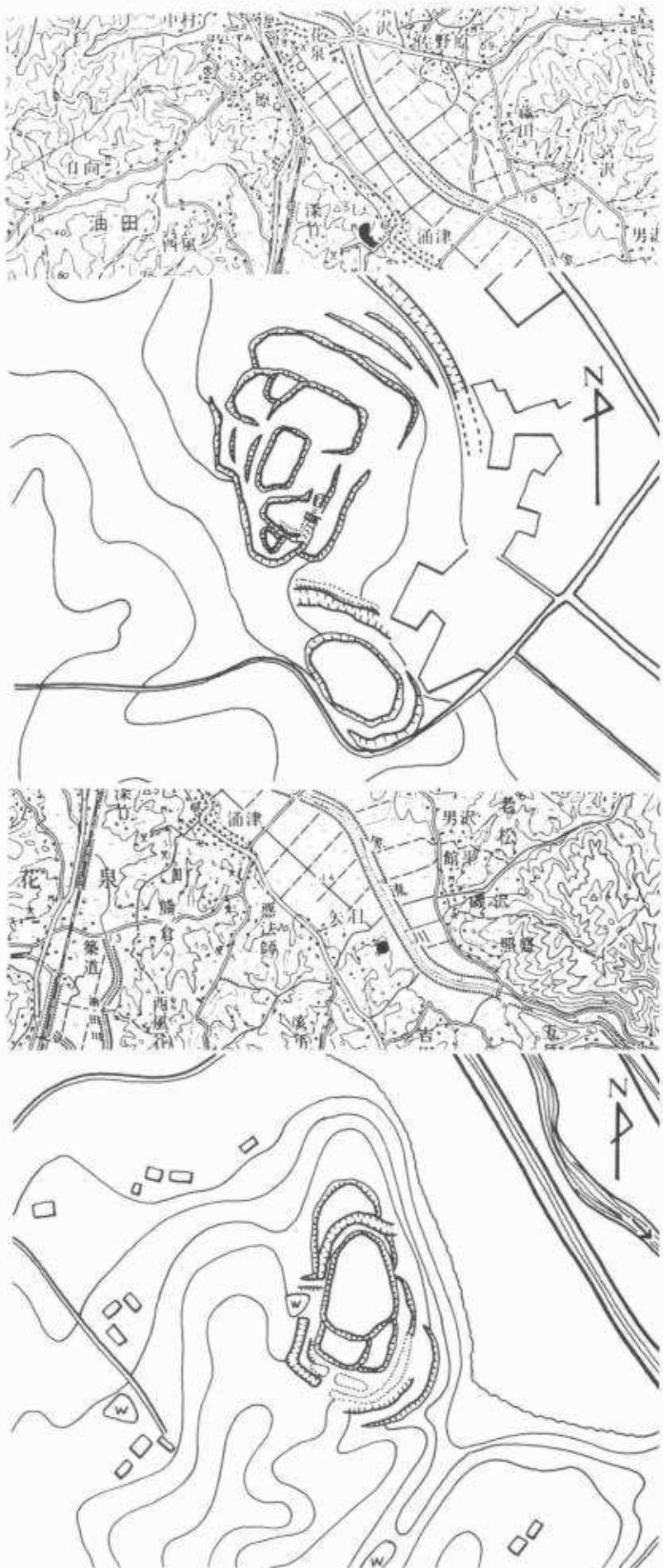
館の北側には沢が入るが、西側はなだらかな斜面が、西南方向へ下っている。

この紫館の南側約100m、沢を隔てた八幡社境内にも、郭と腰郭、空堀、土壘がみられ出城と推定されている。

城主は「古城書上」には涌津四郎兵衛（高景）であるが、岩手県史等では、涌津岩渕家系図に従がい、徳治元（1306）年の岩渕正経の移居から天正年中の経文まで8代を伝えている。また、寛永年間から寛文年間まで、伊達家臣瀬上宗時、宗教が居住し、涌津原の開墾を奨めた伝えもある。

下紫城（館） 西磐井郡花泉町涌津字矢ノ目
花泉から国道342号線を南下し、矢ノ目バス停から東に約1km、南から北に延びる丘陵が金流川に面したその先端にある。東から南にかけ沢が入り、北から西にかけても沢で侵食され、舌状の丘陵となる。

主郭は、南北96m東西46mで、南側半分には段が付く。金流川に対する東側は急斜面でここ以外には腰郭がまわる。南側の虎口と思われる場所には空堀、土壘そしてその外側にも空堀がみられる。この外側の空堀は西側へも続いている。虎口西側の土壘の端が一段と高く広くなっており、櫓台跡と考えられる。



青葉山城 西磐井郡花泉町永井字角屋

北上川は金流川と合流し、東に向きを変える。青葉山城は、この合流点の南方約1km、九千沢からの丘陵先端部に位置し、東西に沢が入る。輪郭式山城で、山頂の主郭を囲み郭と腰郭、空堀が配される。主郭は標高約70m、南北72m東西約35mで、北東部に小祠がありその部分が一段高く、北に接して湧水がある。主郭北側は5mの段差で31×37mの二の郭の平場、その西の下側から主郭南面にかけ腰郭が付く。この南端には、幅約7~10m、長さ50mの土塁が築かれてる。その外に、幅7mの空堀があり、その先に三の郭(80m×25m)がある。三の郭の西には、空堀が南に行くにつれ広がり、尾根へと続く。また、約30m南西部の尾根筋に空堀、そこから三の郭の南面へと、腰郭状の段が付く。

「古城書上」「風土記書出」に、永井讃岐の居城を記載する。先行して菅原道長、春道(西永井館主)居住の説もあり、さらに平安末期の及川筑後、照井次郎の伝えもある。

大塚館 西磐井郡花泉町永井字杉則

高倉山の北西部、永井地区の脊梁となる丘陵が夏川の沖積部の水田地帯へ突き出した先端に位置する。北、西、南の三面は水田地帯に囲まれる。標高は約24m、長軸約300m短軸150m、北東から南西に長い館跡である。

主郭はその中央部の43×56mの平場で、空堀を隔て北東部に二の郭(35×30m)が付きこれらを取り巻いて腰郭がまわる。館の基部に灌漑用水路が回るが、これは水濠の跡と伝えられている。

本館は、葛西氏滅亡後に伊達家臣大塚氏が築いたとされ、館の南西約200mのところ(寺場)に大塚氏代々の墓と家臣達の墓がある。



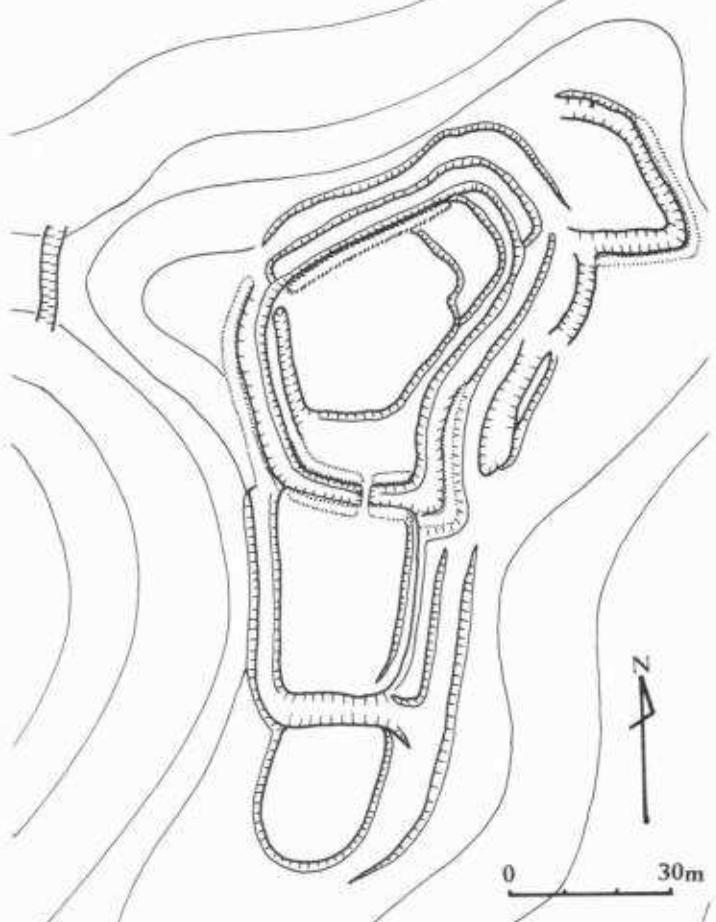
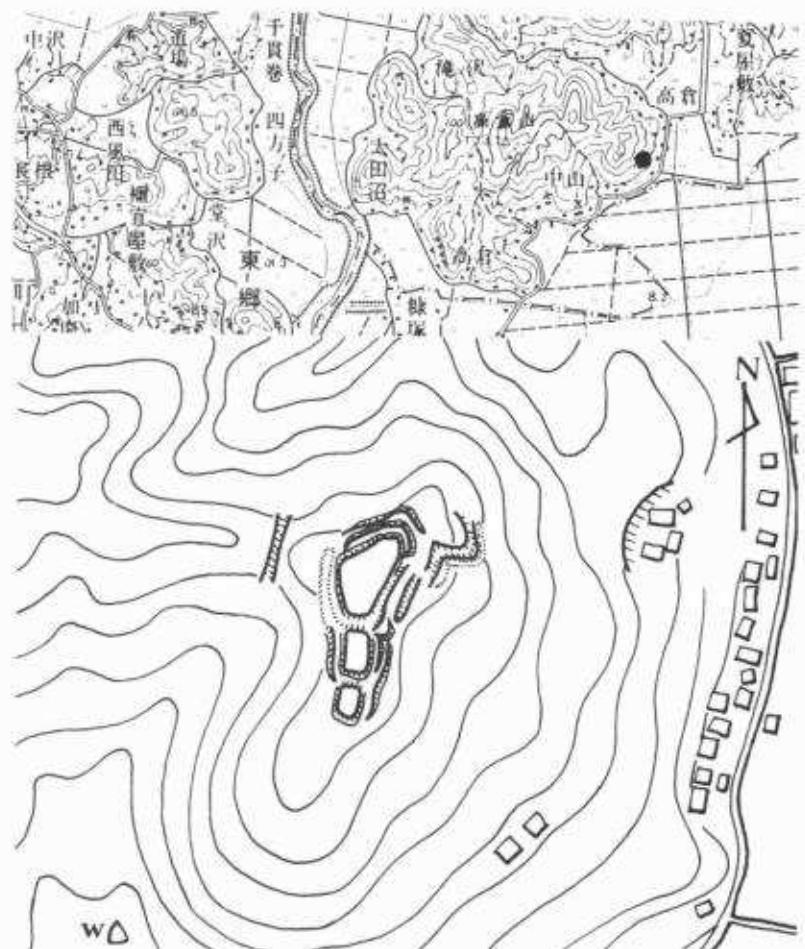
高倉城 西磐井郡花泉町永井字薬師沢

花泉町の南端、宮城県境に接する高倉山の西側、標高約100mの丘陵頂部に位置する。丘陵下を県道石森・永井線がまわり、北、東、南の三方は急な崖に囲まれる。

主郭はこの丘陵頂部の60×22mほどの平場で、東側に浅い空堀がみられ、南に至って段となる。その下約3mのところに南側を中心とした空堀がまわり、北に行って腰郭となる。この空堀の外に土塁が付き、東面ではその下に腰郭もまわる。二の郭は主郭の南に、南北約30m東西20mの平場を作る。さらにその南には空堀があり、その先に三の郭(20×10m)が築かれる。これらの東西にも腰郭が付く。

主郭の西北部に虎口の跡があり、主郭へは空堀沿いに一端二の郭へあがり、主郭との空堀にかかる土橋を渡って達することとなる。主郭の北にも腰郭が付き、北東部は幅10m程に広くなり、出郭状になる。この出郭状の南にも空堀が、そしてその外に土壘が築かれる。全体的には三つの郭と出郭を持つ連郭式の山城といえる。また、館の西側に尾根筋を切る空堀もある。

「安永風土記書上」には、加瀬谷三河の居住とある。

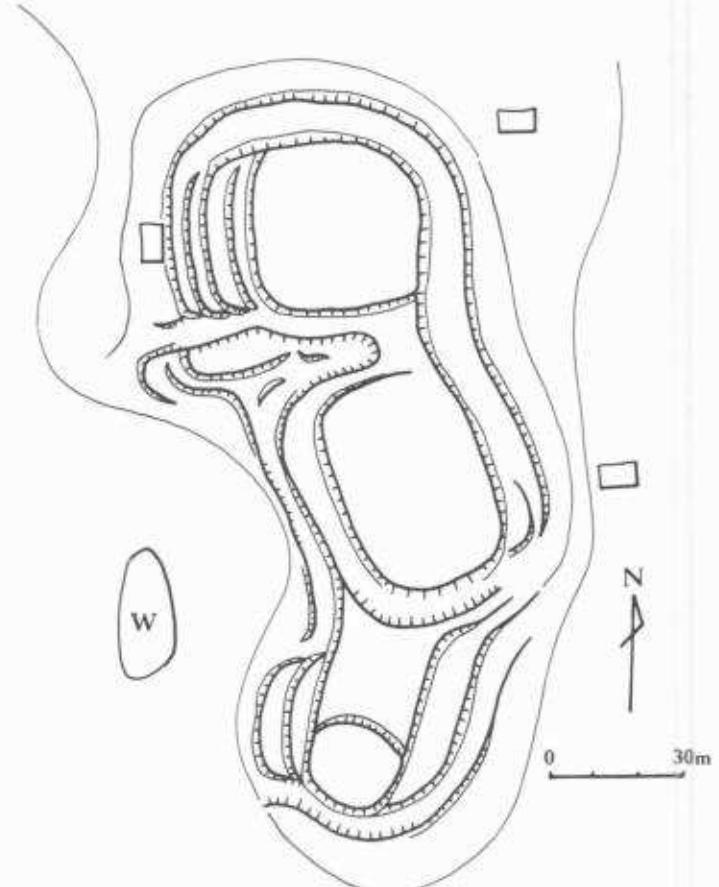


西館 西磐井郡花泉町油島字飛ヶ沢

花泉から油島駅前を経て南下した県道花泉若柳線は、油島貝鳥の夏川上の県境付近で西に折れる。西館はこの右折する所の北西約500mに位置する。館の南方には夏川を隔て石越周辺の水田が広がる。

主郭は一辺約25mの方形の平場で、一段下り南に二の郭(45×20m)、その南の丘陵先端にも、狭い平場の三の郭があり、これらはそれぞれ空堀で区画される。主郭西側には幅約2mの腰郭が数段設けられ、三の郭西側にも二段の腰郭が付く。三の郭の南の先端には斜面を切って空堀が付き、二の郭の西下部にも空堀があることから、かつては西面全体に館域に沿って空堀があったものと考えられる。

「古城書上」では城主鈴木某、「風土記書出」には佐々木安芸守とあり、この他にも熊谷氏の来住の伝えもあるが、これら各氏の関係については不詳である。

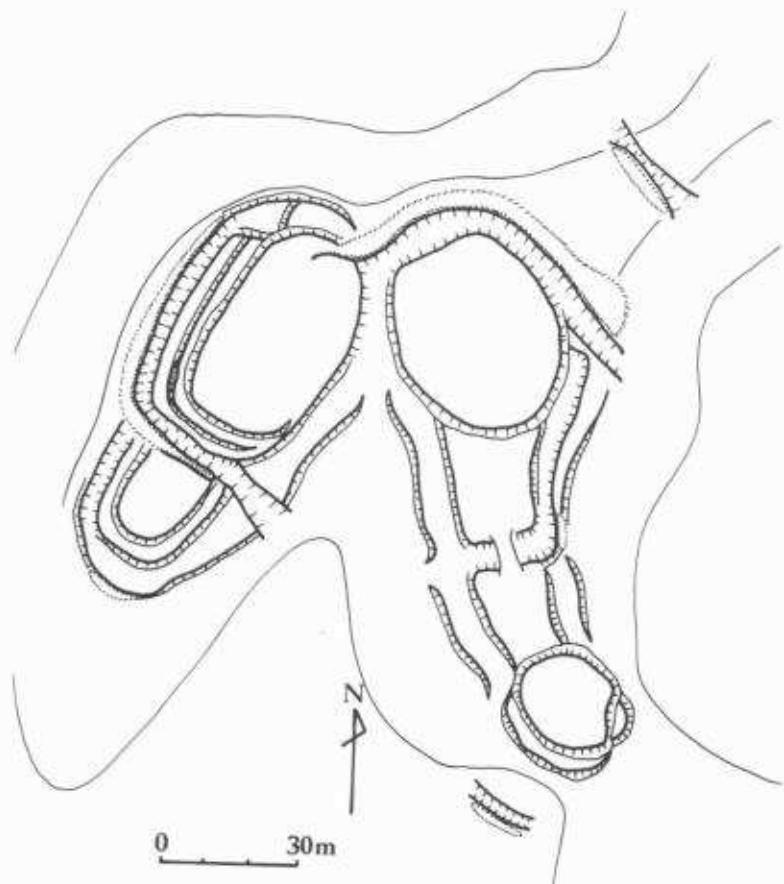


蒲沢館 西磐井郡花泉町油島字蒲沢

蒲沢館は県道花泉・若柳線のバス停油島小学校前から西方へ約500mのところにあり、東の油島小学校へ緩かに下りながら延びる丘陵上に位置する。館の南面には蒲沢の沢が広がる。館の形は南から入り込む沢を挟んで、東に主郭、西二の郭と八の字状になる。

主郭は南北38m東西31m、南に一段低い郭があり、空堀を隔てその先にも腰郭を持つ20×15mほどの平場がある。主郭とこの平場の間の東西にも腰郭が付く。主郭北側には大空堀がまわり、その外側に土塁、さらにその先にも土塁と空堀がある。二の郭は空堀で主郭と区画し、北東部に数段の腰郭、最下段に土塁が付く。この腰郭の下段は二の郭南面で空堀となり、土塁も続きその南にまた腰郭を持つ郭が築かれる。主郭の北東と南東の先、それに二の郭の南西先にも物見と思われる小平場がみられる。

「風土記書上」には城主二階堂肥前と記す。また千葉右馬亮定時が永享10年に移居し、5代目の肥前良胤が石越西川館に転居したという説もある。



高崎館 西磐井郡花泉町永井字岫前

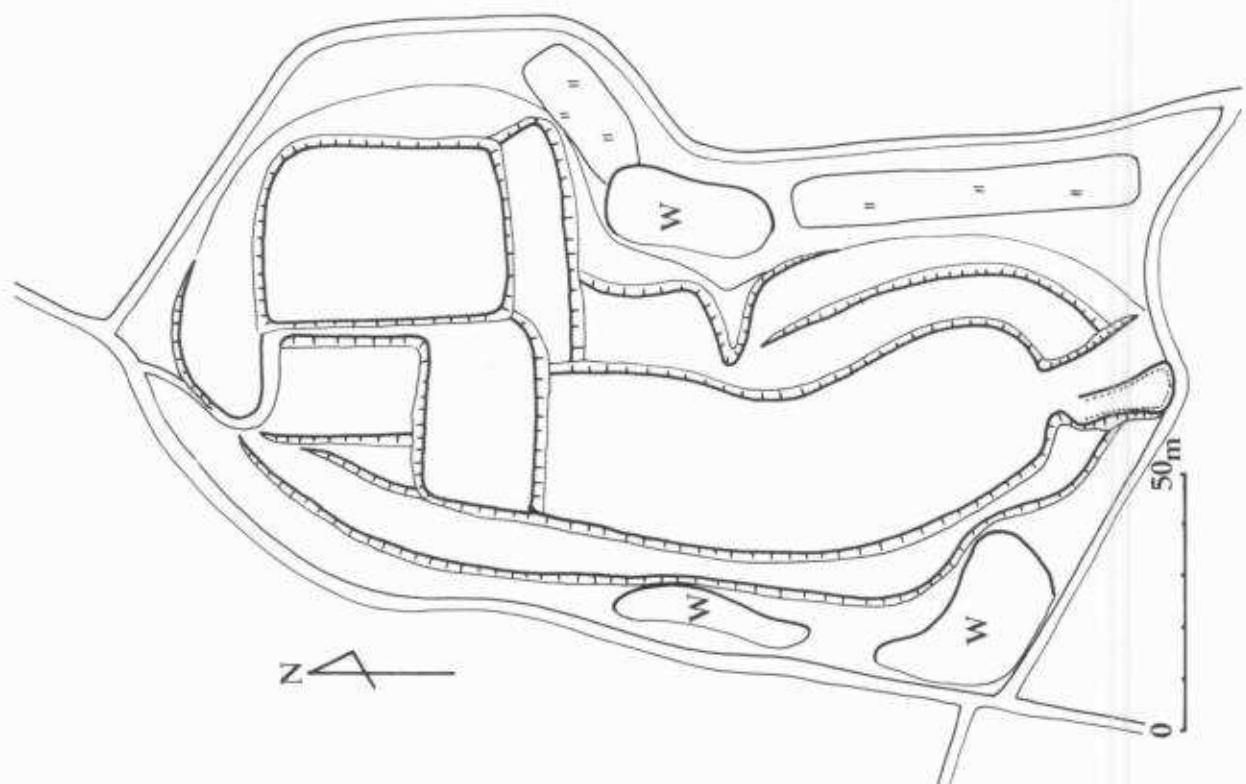
青葉城のある丘陵の西方、水田地帯に突出した標高約25mの丘陵の先端部に位置する。

館の範囲は長径約250m短径約120mの長円形で、段差を持つ三区画から構成される。

主郭は丘陵北端部にあり、南北46m東西35m。西南部に低い郭が南北20m東西35m。これの南側に、南北100m東西33mの大きな二の郭が付く。これらを取り巻いて腰郭がありさらにその下には溜め池や細長い水田、畑が断続的ではあるが、館跡を囲んでいる。これは、空堀ないしは水濠の跡と考えられる。

館の南端には、尾根を区切るように東西に道路が通じるが、これも、背後を断つ空堀の跡の可能性がある。

館主は、若原長友と伝える。



二櫓館 西磐井郡花泉町花泉字上館

東北線清水原駅の南東約500m、清水の集落の西側丘陵上に位置する。この丘陵は、金流川とその支流有馬川の合流点に向って東へ張り出し、その先端の頂部を中心に占地する。

主郭は南北約75m東西約70mで、主郭西と南に土塁が築かれる。主郭西部に八幡神社が鎮座する。主郭の東面から南面にかけ、幅の広い郭がとり付き、二の郭、三の郭になると思われる。主郭の西には空堀が南北に掘られさらに尾根筋に沿って西側約23mのところに土塁とその外に空堀が、尾根を切る形で南北に造られる。

二の郭の南西部は一段高くなり主郭西端の土塁に接することから虎口と考えられる。また二の郭の北東部主郭の基部に湧水があり、町名花泉の由来の元となっている。

「古城書上」記載の城主は清水刑部少輔、また「風土記書出」には、文屋綿麻呂、熊谷次郎直季・照井太郎高春等に続き、葛西清秀（延慶2）、中村孫九郎信実（明応9）そして清水玄蕃、其子刑部少輔と記され、その後留守政景も文禄から元和まで居住したと記されている。

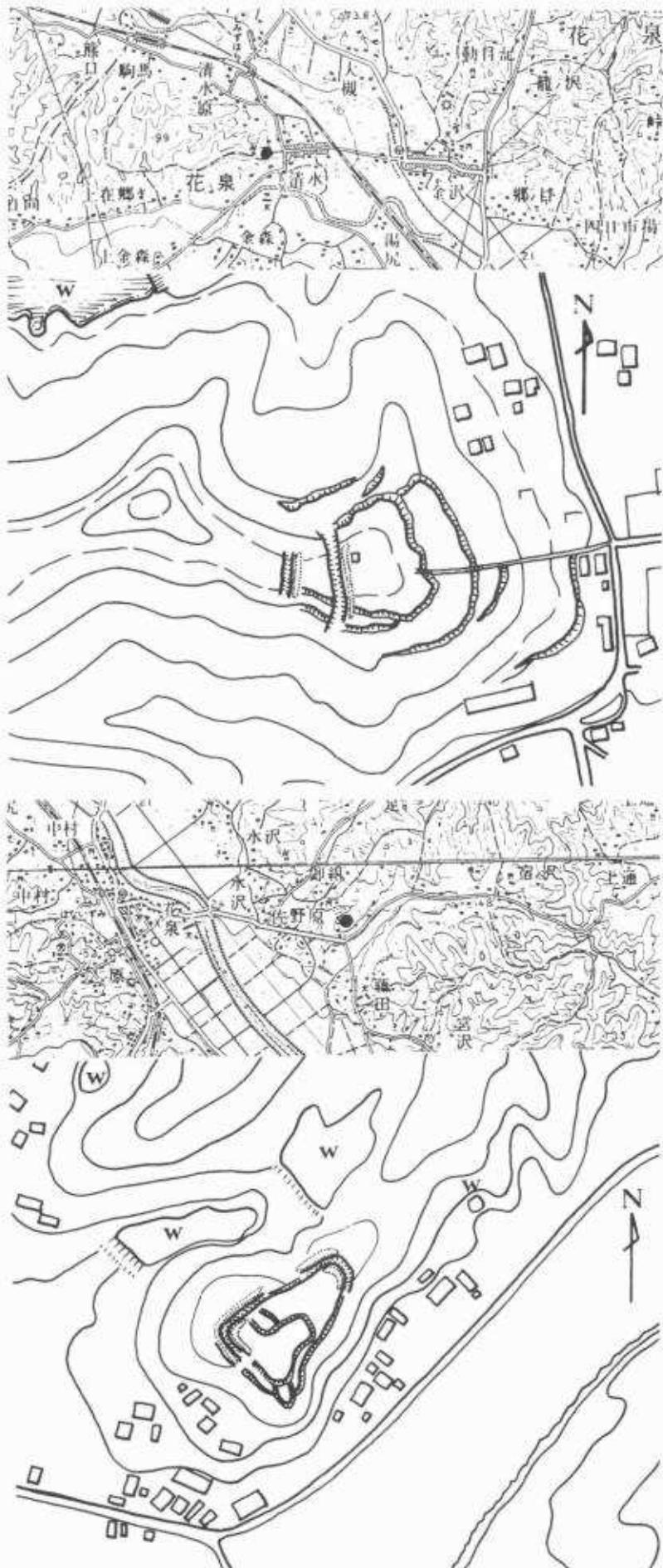
杉屋敷館 西磐井郡花泉町老松佐野屋敷

花泉駅前より県道花泉藤沢線を東方へ約1.8km、県道と町道館ヶ崎線の三叉路の北東部の丘陵にある。この丘陵の南東部は県道沿いの水田が広がり、北には奥に堤を持つ沢が入り込み、南西部に舌状に突き出した丘陵となる。館城はこの丘陵の先端部にあり、南西部の主郭と、一段下がった北東部の二の郭に分れる。

主郭は東西約80m、南北の最大幅50mの不定形の平場で、南西面から北にかけて空堀がまわり、北面には外側に土塁も築かれる。主郭南端には舌状の張り出しがある。

二の郭は長さ76m、幅26mで、北東部先端に土塁を持ちその下に空堀がまわる。

「風土記書出」中には、薬明館本丸館城主寺崎石見守の御祈願所善明（賢）院という修験者が住したところという。

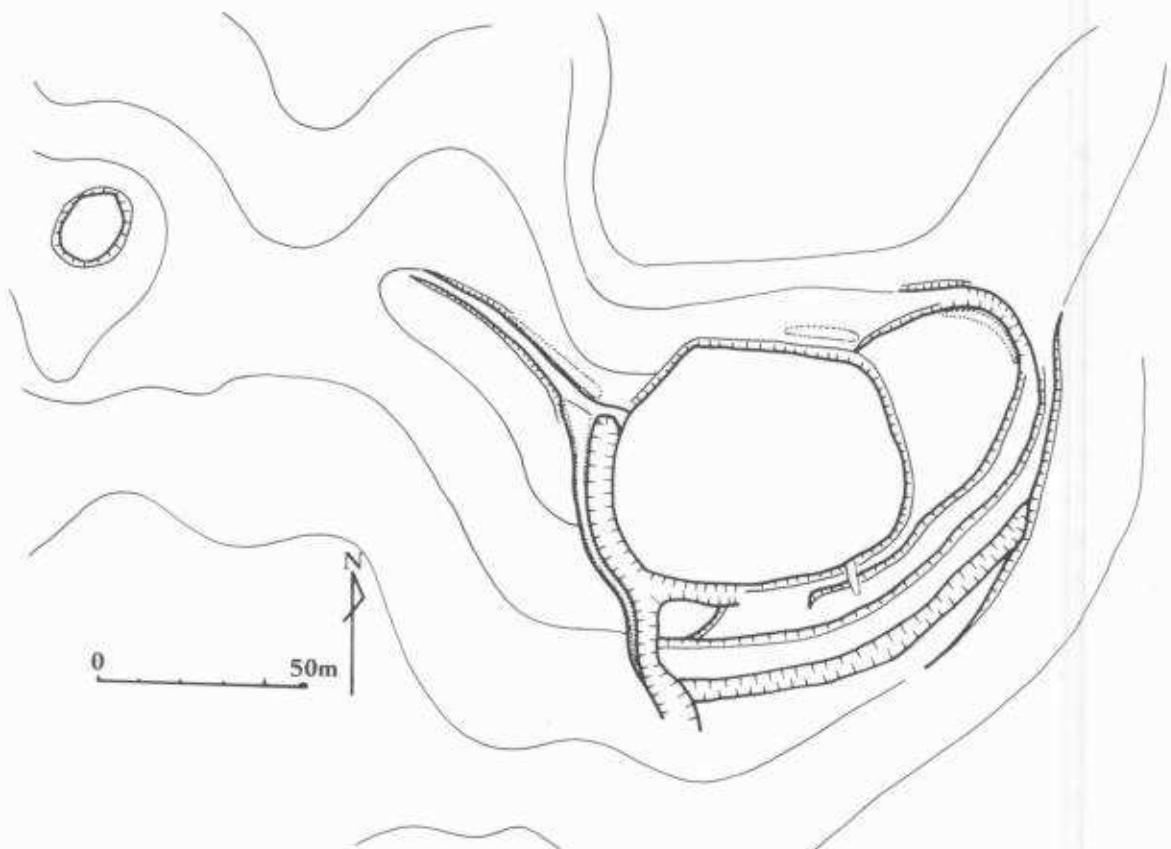
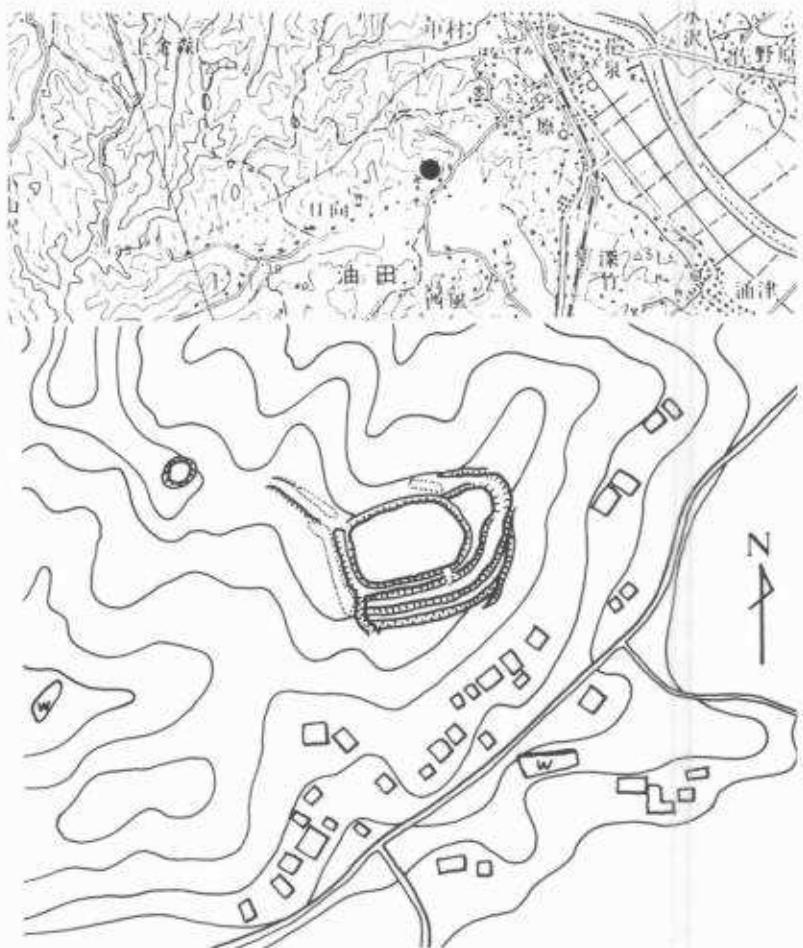


上油田城 西磐井郡花泉町油島穴の沢

花泉駅の西南、町道上油田線を日向の方へ約1km行った右手の丘陵上に位置する。館は北から伸びた丘陵が東へ鉤形に曲がる頂部に築かれる。

主郭は南北51m東西65mの方形の平場で、西側に深さ約4m幅8mの空堀が南北に堀られ、南西隅で南の腰郭方向と斜面を下るものとに分かれる。この空堀の西には土塁がある。二の郭は主郭の北東部に約2m下がって築かれその先端に土塁と空堀がある。この空堀は主郭南面の腰郭へ続き、その腰郭の先端にも空堀が付く。館の北側は放牧地として造成されているが以前には空堀と土塁がみられたという。現在は主郭の北東部に若干土塁が残るのみである。また、主郭西北部方向に、長さ25mほどの土塁がのがびその先約80mのところに物見跡と思われる円形の小平場がある。

「風土記書出」中に、城主上油田金七郎とある。別説には、天正年中稻辺出雲守行繁が居住したともいわれる。



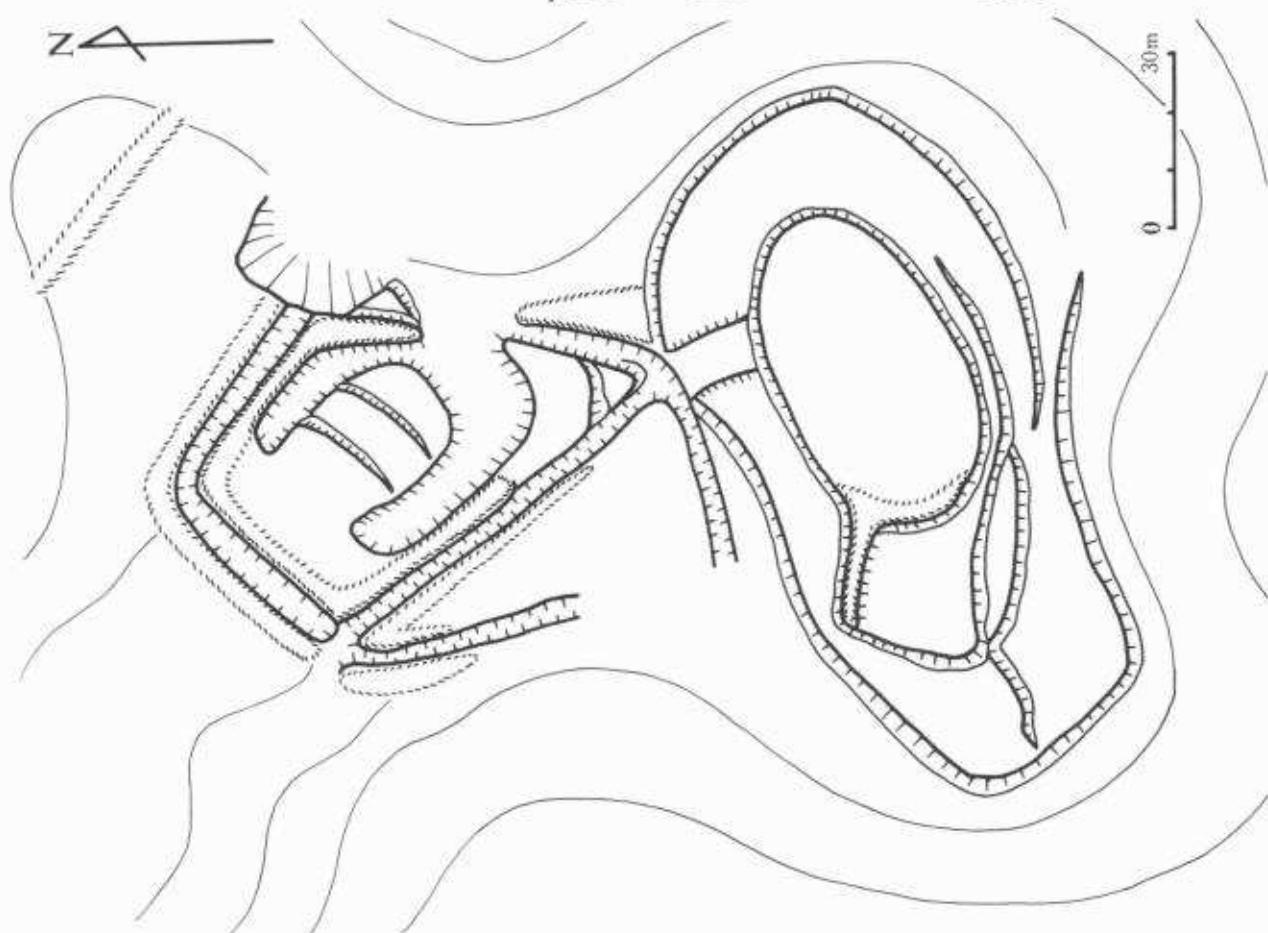
高森館 西磐井郡花泉町花泉字館前

花泉駅から清水を経て金流川を遡る。町道花泉末野線の右手、養寿寺の裏山にある。館の東西には沢があり、急な崖となる。

主郭は東西約50m南北30m楕円形の平場で西側に土塁を築き、その外側に小さな郭が張り出す。この郭の北部にも土塁があり、全体を腰郭がまわる。

二ノ郭は主郭と空堀で区画され、北側に位置する。形状はほぼ台形。東側を除く三方に空堀があり、その内外に土塁を巡らす。郭内は北西部の土塁の下に武者走り状の平場があり、南東に向い舌状に張り出す。東側中央部が土塁、空堀共途切れる場所があり、木戸口と考えられる。

「古城書上」には、奈良坂源右衛門以下5代の城主名があげられている。なお、養寿寺には、文明13（1481）年の金銅薬師三尊坐像懸仏が奉納されており、銘文中に平勝奈良坂道慶の名がみられる。



菊明館（本丸館・北館・東館・南館）

西磐井郡花泉町老松峠沢及び日形字上通
花泉駅前より県道花泉藤沢線を約4km東進
すると旧老松村と日形村の境界の通称割山に
至る。この割山の稜線伝いに北西約600mの
間に、ほぼくの字形に配置された菊明館四館
(本丸館・北館・東館・南館)がある。

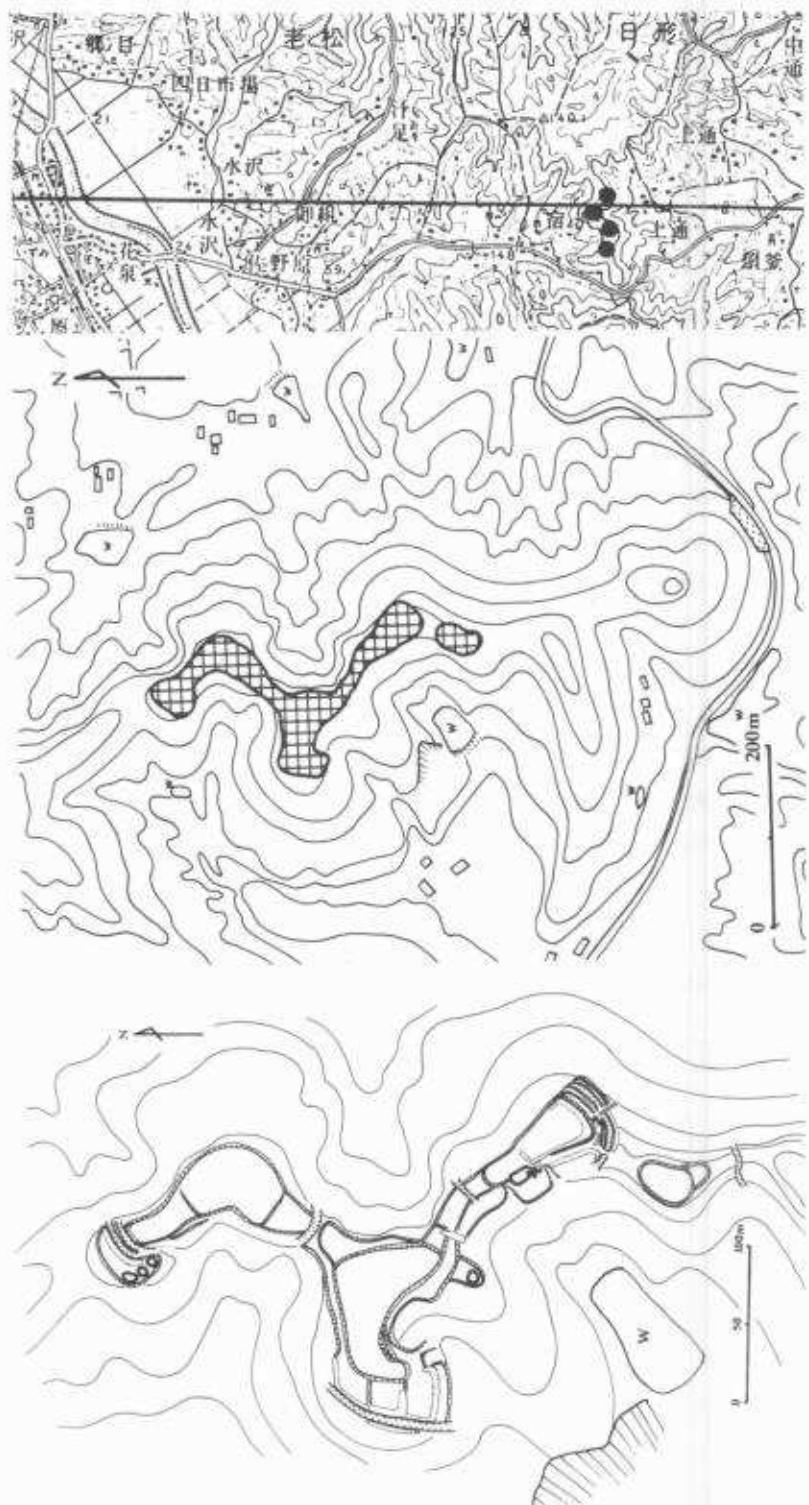
本丸館は、四館の中央部、他の三館より一
段高い標高約130mの丘陵上に位置する。館
全体は東側を底辺とする三角形で、その頂部
に南へ折れ曲る主郭が作られる。北館と東館
とは空堀で区切る。北面・南面に腰郭が付く。
主郭西側には南北に小郭が三つ配され、周辺
を土塁で囲み、その外側に空堀さらに土塁が
築かれる。

北館は本丸館の北東に逆くの字状に築かれ
る。主郭はそのくびれ部分にあり、南西部に
低い土塁を作る。北西部には段差を以って長
さ40mの細長い郭があり、その先端に平野神
社が祀られる。神社背後には土塁・空堀・土
塁・空堀・土塁の順で尾根筋と区画している。
その先端の西側に櫓台跡と思われる小平場が
三段ある。腰郭はあまり明確ではないが、こ
れは館の東西が急傾斜であることに帰因する
と思われる。

東館は本丸館の南東に位置し、尾根の鞍部
に沿って築かれる。主郭には西面と東面を中
心に土塁がまわり、北西部の本丸館側に舌状
の郭が張り出し、その先に細い空堀と、土塁
のある大空堀で、本丸館と区画する。この西
側には腰郭が付き、主郭西側でやや張り出す。
主郭の西側・南側には空堀と土塁が交差に築
かれ、その南西端には虎口と思われる通路が
みられる。

南館は東館の南西約30m、尾根上の小規模
な主郭があり、ここから南にも小さな郭が付
く。東西は急な崖で腰郭等はみられない。南
端の尾根には、狭い空堀が一本あり、尾根筋
を切っている。この南館は規模等からして出
郭的様相が強いと考える。

「古城書上」「風土記書出」等では、本丸館
に寺崎石見守、北館に千葉伊豆、東館に岩淵
美作、南館に千葉大隅と、寺崎氏とその家臣
團の人々の居住を伝えている。



葉山館 西磐井郡花泉町日形字石畠

葉山館は花泉から日形へ向う県道花泉・藤沢線の機山バス停の南方に位置する葉山（標高79m）の頂部に築かれる。東と北面は、日形から続く冲積面が広がり西にも須釜の沢が南北に入り背後には、沢・道路があるため、独立丘陵状を成している。

主郭は、この丘陵頂部の不整形な平場で、二段の腰郭が南から東部へかけてまわる。北には主郭に接し二の郭があり、これらの東側は急崖となり沢へ落ち込む。この郭北端には土塁が付く。館の西側には深さ2m長さ約150mの空堀がまわり、両端は南面・北面へ曲り進む。この空堀に沿いその外側に土塁も走る。西面中央部で、この空堀と土塁が切れ噴い違っている。虎口と考えられる。

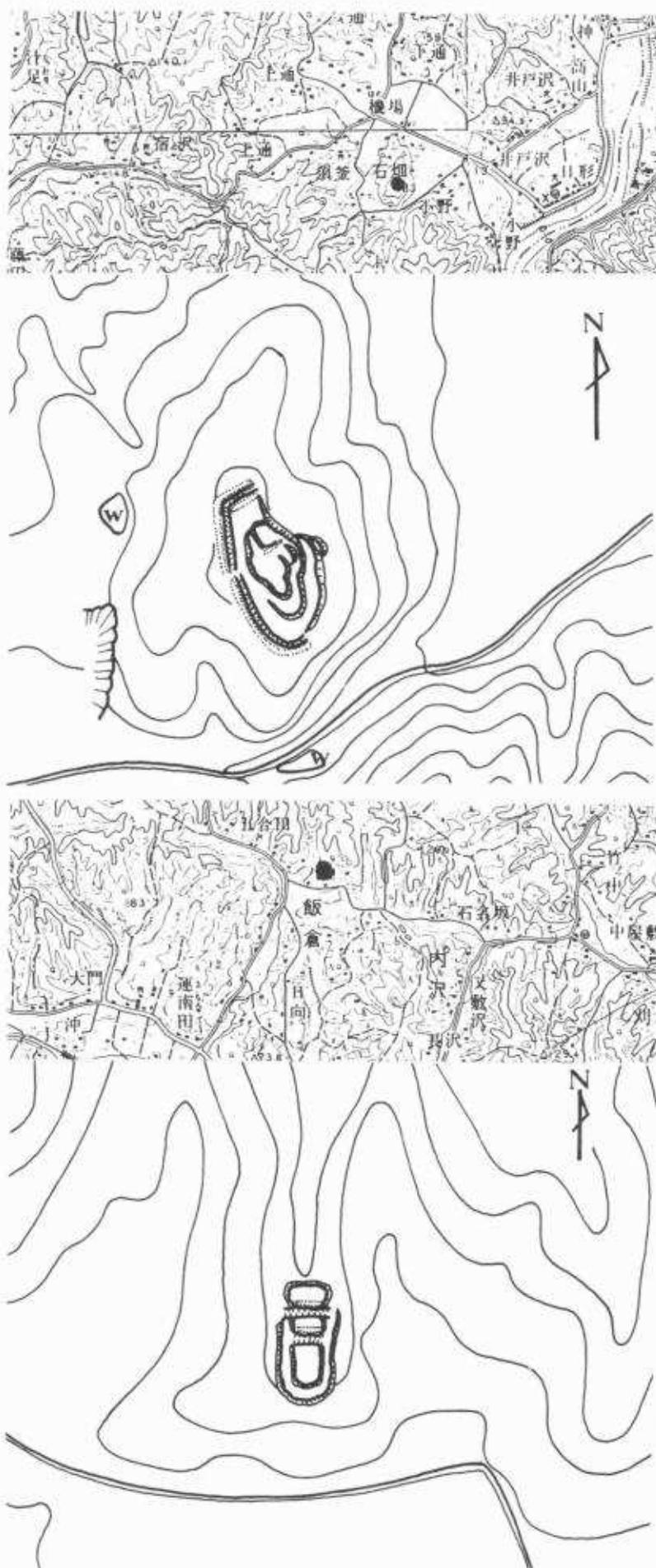
「風土記書出」記載の館主は小野寺肥後。この小野寺氏は、岩手県史記載の石畠館主小野寺氏系図によると、文明7年に本城に入り以降約80年間居住したとあり、その後、天正年中の富沢一族の騒動や氣仙浜田兵乱にも小野寺肥後の名を見ることがある。

飯倉館 西磐井郡花泉町金沢字要害

飯倉館は、清水原駅の北方約2km、五合田の低地に北から張り出す丘陵の先端で、東西に沢が入り込む。丘陵頂部の平坦地（標高約90m）に占地する。

この平坦地は、東西に走る二本の空堀により三区画され、背後は緩かに丘陵尾根へ続く。先端部の郭は南北50m東西24m、大槻館より移されたという八幡社が鎮座する。空堀を隔て、次の郭の南側には土塁が築かれる。さらに北の郭にも同様に土塁がみられる。これらの郭の東西南には腰郭がめぐる。その外は東側は急斜面、西側は緩斜面となり沢へ落ちている。

「古城書上」には千葉四郎兵衛、「風土記書出」には、最初熊谷伯耆、後に千葉四郎兵衛泰常（天正18年、深谷櫟塚で戦死）が居住とある。四郎兵衛はこの飯倉館から大槻館へ移住した記録も同書にみられる。



(七) 東磐井地区概観

仙台藩が延宝年中（1673～81）に徳川幕府へ出した『仙台領古城書上』では、所取536ヶ城の内、磐井郡東山は44ヶ城を数え、仙台領内21郡中最も多い数である。寛永検地後の東山の村は46ヶ村であるから、ほぼ1村1城という数になる。

今回の調査で記録した城館数は182あり、『仙台領古城書上』の約4倍である。『史料仙台領内古城・館』では東磐井100ヶ城と報告している。182の中には、「館・要害」等の名前があるのみで、遺構の不明瞭なものも含まれており、仙台藩給人屋敷も含まれている。口伝の風化、土地造成による消滅等各種推考されるが、後世史・資料の発見に繋がることもあるうかと考え記録した。この調査時の捉え方は調査員の判断に委ねられた部分が多い。

文治5年（1189）奥州藤原氏を滅した頼朝は、功名のあった家臣に奥羽の所領を与えた。『岩手県史第2巻』によると

葛西清重 伊沢・磐井・牡鹿・外数箇所（吾妻鏡）
千葉頼胤 胆沢・磐井等五千貫文（長坂千葉氏系図）
とあり、鎌倉武士の来住となる。葛西氏の所領について、「五郡二保」と呼ばれる所領範囲はどこを指すものが諸説がある。『奥州余目記録』（仙台叢書第8巻）では、「葛西、本所五郡二保とは、江刺・伊沢郡・気仙に元良に、岩伊郡、奥田保黄海保是也。（以下略）」とありこの中の二保とは、磐井郡東部を南北の二区に分け南方を黄海保、北方を奥田保としたものと考えられている。また「葛西七郡」「葛西八郡」とも言われている。「葛西七郡」についての論考は数多くあり「郷」数も推移している。東山についてみると

奥州葛西記・葛西盛衰記	33郷
葛西実記	45郷
葛西真記録	33邑
貞享書上	46村

となっている。仙台藩では、文禄、慶長、元和、寛永と検地を行なっているが、寛永の総検地により46ヶ村の村が確定しており、それ以前は何村であるか不詳である。村落の変遷は、中世社会の構造を知る上でも欠く事が出来ず、中世城館研究にとっても貴重である。

南部北上山地、とりわけ磐井郡東山と呼ばれる東磐井は古代より、砂金、砂鉄の産出地として全国に名を知られている。西端に北上川が流れ東は沿岸地域へと続いている。東磐井から流れ出る河川は、砂鉄川、千厩川、黄海川、大川、津谷川、二股川である。これらの河川の流域別に城館

の分布を見ると

砂鉄川流域	66	千厩川流域	54
黄海川流域	39	大川 流域	18
津谷川流域	3	二股川流域	2

計182となる。（但し津谷川、二股川、大川流域については、岩手県内分のみである。）流域面積の広い場所に多くの城館が集中していることがわかる。

砂鉄川下流域では、急峻な山陵斜面を利用した城館があり、門崎城、布佐館などがそれである。上流域には、丘陵の尾根を空堀により断ち切った構を見せる城がある。根城山吹館、遼沢城、伊勢館等がある。千厩川流域では連郭式の大型城館があり、薄衣城、千厩城、橋城がある。黄海川流域では、山頂部或いは標高の高い尾根に占地している。熊館、深堀城、藤沢城、陣ガ森館等がある。各流域共、沖積地を臨む周辺の丘陵に占地する傾向が見られる。

各城館主共、葛西家臣〇〇某の記載が多い。葛西宗家の下で、有力武将（旗頭）は、勢力拡大を計っている。永禄2年の柏木合戦、天文19年の大弓論争から発展した亀卦川騒動、天正年間に入ると東山徳田騒動、奥玉千葉氏と薄衣氏の衝突、大原千葉氏と岩淵近江守の衝突、等々ある。東山の外では、浜田争乱、富沢日向守の叛乱、柏山兄弟の乱等々起きている。東磐井の城館の多くは、この様な世情緊要の中で築造、改築されたものと考えられる。

仮坂城（兵庫館、愛宕館）千厩町磐清水字
中上

千厩町立磐清水小学校の北約1.5kmにあり、同城の北100mに鷲嶺庵がある。藩政時代は、仮坂村と呼ばれた。同城は丘陵先端部にあり標高130m～190m程である。推定城域東西300m×南北300m程である。鷲ノ巣山陵から張り出した丘陵を二重の空堀により断ち切っている。

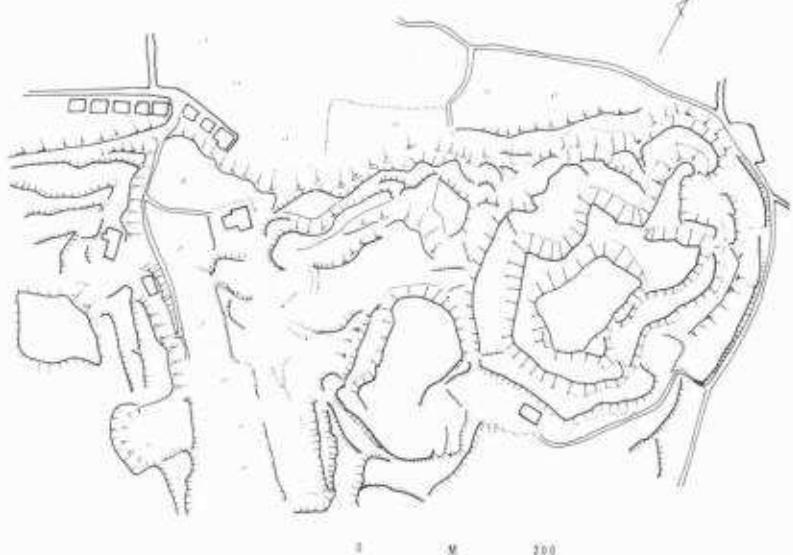
頂部は主郭（23m×25m）の北側に土壘状の高まりが遺る。主郭北側後背に前述の空堀がある。本郭の東側に2の郭がある。更に、東側の下位の郭は比較的平坦で北寄りに井戸跡と伝えられる場所がある。下位の郭からは縄文期の土器片を表採出来る。

『仙台領古城書上』では「山仮坂城、東西21間南北40間城主龜卦川兵庫・仮坂加賀・又加賀彌右衛門・彦五郎・彦左衛門」とある、『磐井郡東山之内旧城43館』では、「一山古城（21間、40間）二ノ丸（33間、38間）砂子民夫太夫居ル其後龟毛川氏仮坂兵庫居住。右子孫伊達工附属」とある。

千厩城（茶臼館）千厩町千厩字館山
エ千厩町役場の南約700mの南から北へ張り出した丘陵に位置する。標高は100m～120mである。北側は急峻な崖となり、千厩川や市街地を望む。推定城域は300m×450mの広範囲である。その多くは、公共用地、宅地化により旧形状を失っている。

丘陵の中央部に北から南へ小谷が入り込み谷頭は溜池となり水田として利用されている。本郭は現在公共用地に造成され当時の面影はない。また2ノ郭の一部は同時に造成されている。3ノ郭である西の郭は、館山公園として町民に親しまれている。略測図は、昭和40年に撮影された航空写真をもとに作成したもので本郭、2ノ郭を記した。

『仙台領古城書上』には、「山千厩城東西38間南北24間、二ノ丸東西38間南北27間城主今野右馬丞」とある。金野氏系図によれば、建久三年（1192）にこの地に来住し千厩城を築いたと伝えられている。



南小梨城（篠木館、中館）千厩町小梨字落合

千厩町の中心部から南東へ約5.7km、町立南小梨小学校の後背丘陵が城館跡である。標高162m～190m程である。推定域域は、東西約300m、南北約250mである。

本郭の最頂部の北側後背に土塁が遺る。この北側に幅5mの帯郭が付き本郭西側の平場へと続く。小学校の後に出口をもつ空堀りは本郭をぐるっと廻って本郭東側で自然に消滅する。この付近は畑造成のためか旧形状が失われている。本郭南側は宅地として利用され、急峻な崖である。北側には舌状に張り出した郭（80m）が小平場を伴っている。西の郭も帯郭を伴って独立している。近世の南小梨村絵図（文化年間？）によれば、「志乃館・中館・西館」と三つの館跡が印されている。中館は本項で本郭に、西館は、西の郭とした場所に該当する。志乃館は、本郭の東側の丘陵に印されている。『仙台領古城書上』に「山小梨城東西39間南北20間二ノ丸東西55間南北12間城主篠崎三河」とある。

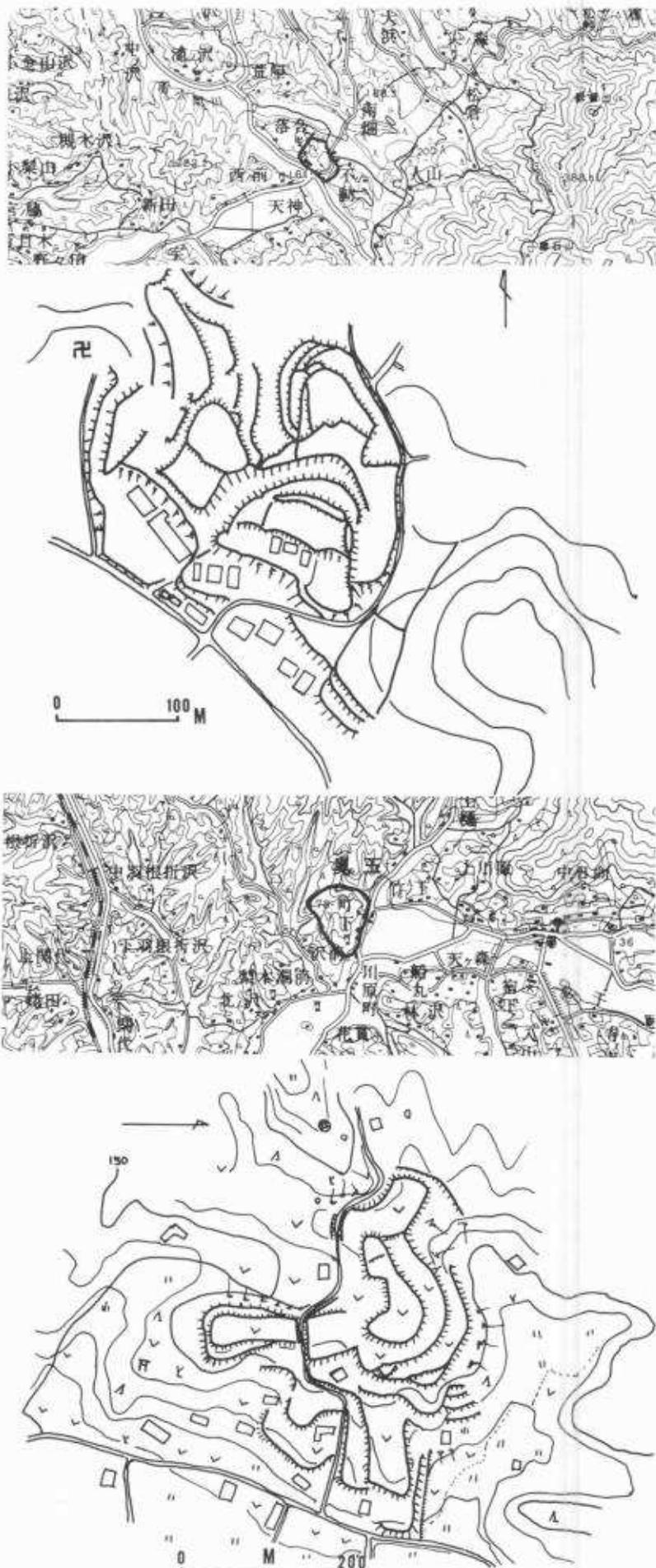
橋城（立花城、六一花城、二日市城）

千厩町奥玉字町下

千厩町立奥玉中学校の西約1kmにあり、東側丘陵麓に町下集落がある。標高120～178mである。本城の位置する丘陵は沢が入り込んで天然の要害としている。これらの沢には、梅ヶ沢、桜ノ沢、松ガ沢、また鶴子沢の名がある。城域は、北は梅ヶ沢から南は桜ノ沢の桜森社境内付近、西は松ガ沢と東西400m×南北500m余りとなる。

本郭、二ノ郭は連っており、周囲を帶郭状の平場がとり巻く。東側斜面は屋敷地となっており、若干の地形の移動はある。南側の桜森神社付近の郭にも帶郭を伴っている。東側の集落は、近世初期まで「町場」として栄えた。二日市、町下の小名はその名ごりであろう。

『仙台領古城書上』に「山六一花城東西66間南北29間二ノ丸東西86間南北44間城主千葉大勝」とある。一説によれば、長承年中佐藤但馬守師久が城を築き、後に千葉氏の居住する処となったといわれる。

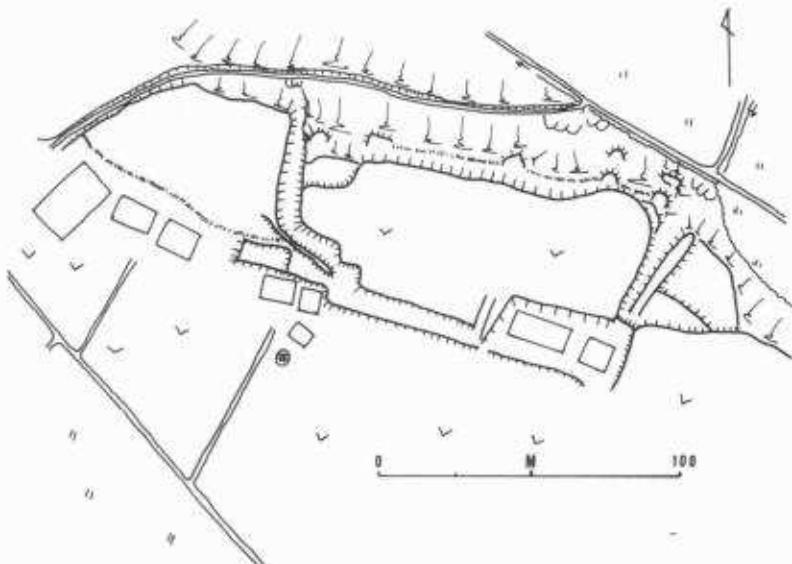
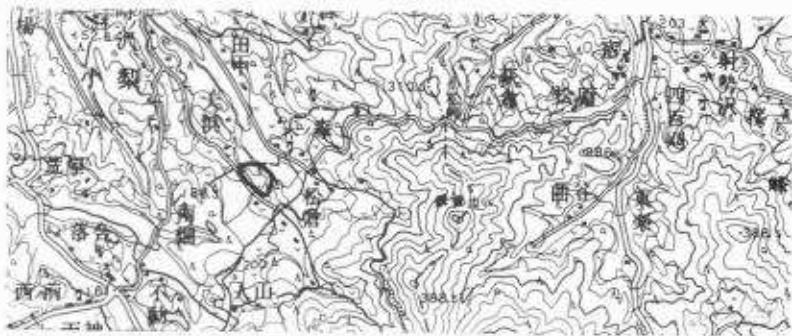


松倉要害館（要害、館） 千厩町小梨字松倉
千厩町立小梨小学校の北東約1.5kmにある。
北に尖ノ森の部落がある。標高175m～
191.6mである。北側が急峻な崖となっている
が南面は、緩い畠地である。

北側から南へ丘陵を切る空堀りが通る。幅
12～3m深さ5～6mある。頂部では幅4m
で2m程の深さとなる。本郭は110m×40m程
である。空堀りは本郭の南面の平場（長さ40
m、幅5～6m）に連結する。東側にも空堀
りが認められ、「館坂」と呼んでいる。城域は
150m×90m程である。周辺に「馬場先」「要害」
「じょうのもと」の小名が残る。

城主は、小梨甚五左衛門と伝えられている。
小梨氏は、小梨城の城主であり、天正18年以
降移り住んだのではないかと思料される。

『天和2年北小梨村除屋敷御検地帳』に小梨
氏の名前や、要害屋敷の名前を見ることが出
来る。小梨氏は、中川村に給地をもらったも
のもあり、伊達家臣とし勤仕している。



山吹館（鶴鳴城、山吹城）大東町大原字川内

大東町役場の北側の丘陵一帯が城館跡であ
る。標高145m～205mの丘陵で、城域は、
700m×250m程と推定されるが、大原商高、
役場の北側に、遺構が密集しており、丘陵先
端部は比較的少い。東端は、役場より山吹・
笠置の部落へ通ずる町道である。

本郭(100m×40～50m)の東に土壘(10m
×20m、高さ5m)がある。西は21m×18m
と郭があり、東の土壘、本郭と周囲を二の郭
が廻る。南側に強い張り出しを伴いながら一
周する、東側は70m×60mの広大な平場とな
る。丘陵の張り出し部分は、帯郭や土塙が巡
る。空堀は北東及び、2ノ郭の西にあり丘陵
を切っている。

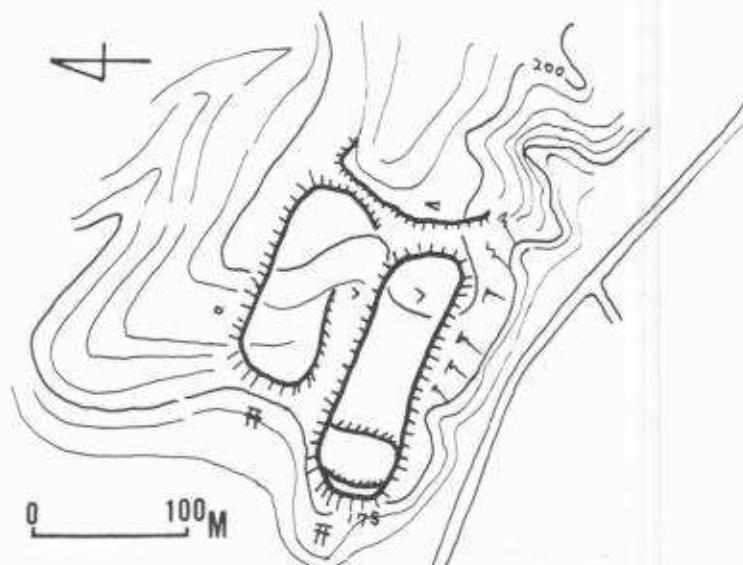
『仙台領古城書上』によれば、「山、山吹
城東西54間、南北22間、二之丸、東西54間、
南北50間城主千葉飛驒。末孫御家中ニ有リ」と記され、『風土記御用書出』『大東町史』『史料
仙台領内古城・館』等、多くの文献に記載さ
れている。



鳥崎館（新山館、八幡寺館） 大東町大原字
八幡館

大東町役場の東約1kmの丘陵上にあり、南側を国道343号線を走る。西斜面には、八幡神社がある。標高170m～205mの丘陵。推定城域東西240m、南北200mである。郭は、南北に並列しており、東端は、空堀（幅5m程）で尾根を切っている。南側の郭は、本郭（46m×120m）の西に空堀（幅5m、深さ8～5m）があり、2ノ郭がある。更に西に幅3～5m程の帯郭がある。北側の郭は45m×130mで、尾根を切る堀切りは、北に伸び、緩く沢に上げる二つの郭の間は、空堀としての機能を持つ。北の郭への取付け付近は土段等の形状が不明瞭である。

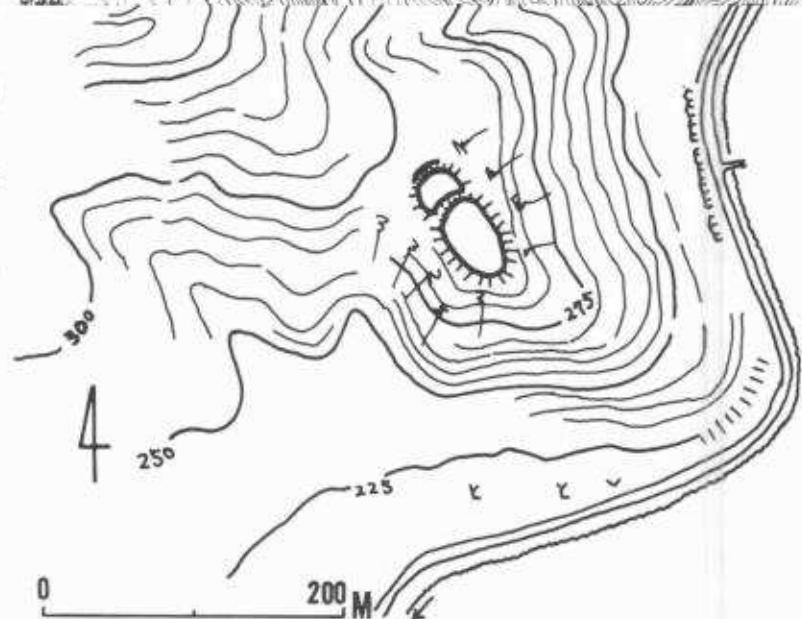
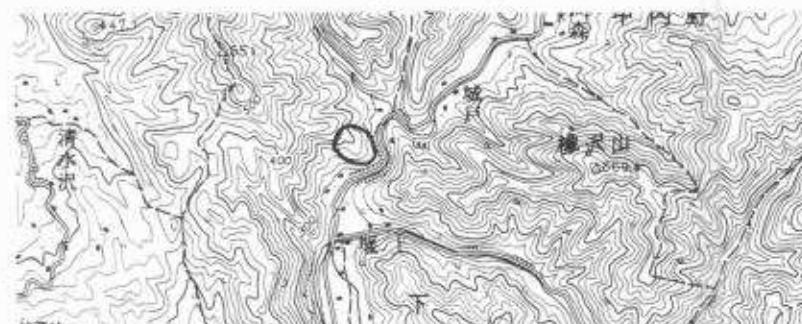
城主、亀井川氏一族。建久三年の築城と伝わる。天文19年大弓論争、永禄元年柏木合戦等、同城主にまつわる事件は著名。『風土記御用書出』『日本城郭大系』『大東町史（上）』に掲載されている。



雨揚館（鳥養館） 大東町大原字明神

大東役場の北東約4.8km、町立内野小学校の西北約1.5kmの山頂に位置する。内野川を臨む急峻な頂部にある。標高280m～295mである。城域は100m×60mである。本郭は50m×30mである。本郭の北側に30m×20m程の小郭をもっている。空堀は、本郭と2ノ郭の間に一条、尾根の堀切りが一条で二条遺されている。尾根よりの1号空堀は幅5m、深さ6m、本郭と2ノ郭の間の2号空堀は幅3m、深さ4mである。

城主は、新山藏人師康（鳥養館主）、小山某と伝わるが、年代等不詳。『大東町史（上）』、『史料仙台領内古城・館』に掲載されている。



内野館 (加賀館、内野沢館) 大東町大原
字古小屋

町立内野小学校の北約1km、標高280m～320mの丘陵に位置。南側は原台山から流れる新倉川が流れる。北は沢が入り込んでいる。推定城域180m×70m。

本郭は、50m×27mで西に15m×30mの2の郭がある。先端部に幅6m程の土壙がある。東端は、空堀りにより丘陵の尾根を切る。空堀りは2条ある。更にこの空堀りの東、尾根方向にメクラ堀りがある。城館に伴うものか、砂鉄採集の跡なのか詳細不明。

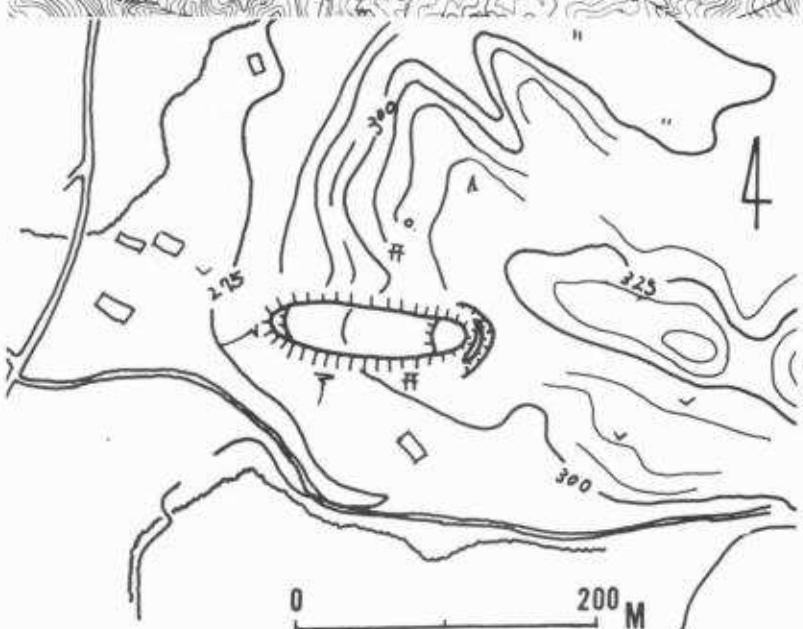
築城者は、熊谷丹後守直氏、文明6年と伝わる。『大東町史(上)』によれば「氣仙沼城主熊谷直行の四男が文明6年(1474)父と不和になり出奔、大原山吹館主千葉肥前守広忠をたよって居館とした。以下葛西家没落まで山吹館の老臣をつとめる。後裔熊谷加賀万治元年(1658)伊達肥前に召されて大原字矢の目に移り、天和年中より御会所鍵番として勤仕している。」とある。『風土記御用書出』にも、城館規模を記している。

柏木館 (鳥海館、東館) 大東町中川字日蔭

大東町立興田小学校の南東約200mの先端部に位置する。中川より流れる川と丑石より流れる分流地点を眼下におく。推定城域は東西220m、南北170m、標高150m～175mの丘陵である。

空堀による尾根の堀切りはない。東に本郭(40m×37m)、続いて西に2の郭(55m×80m)がある。北側斜面に幅2m程の土壙が断続的にある西～南側は、幅5～15mの土壙がとりまいている。

本城は、前九年の役の鳥海の柵の伝えを持つ。中世には、及川氏一族の居館である。城主に及川大勝光村、及川美濃之助頼家がある。永禄2年(1559)の柏木合戦により及川一族は滅亡している。『仙台領古城書上』によれば「山鳥海城東西20間南北22間二ノ丸東西25間南北30間城主鳥海彌三郎居住。其末天正之此。及川美濃居住」とある。『風土記御用書出』『大東町史(上)』『日本城郭大系』にも記録され、同地区における中心的城館といえよう。



川鶴館（鳥海柵、川股館、川服城、西館）

大東町鳥海字西館

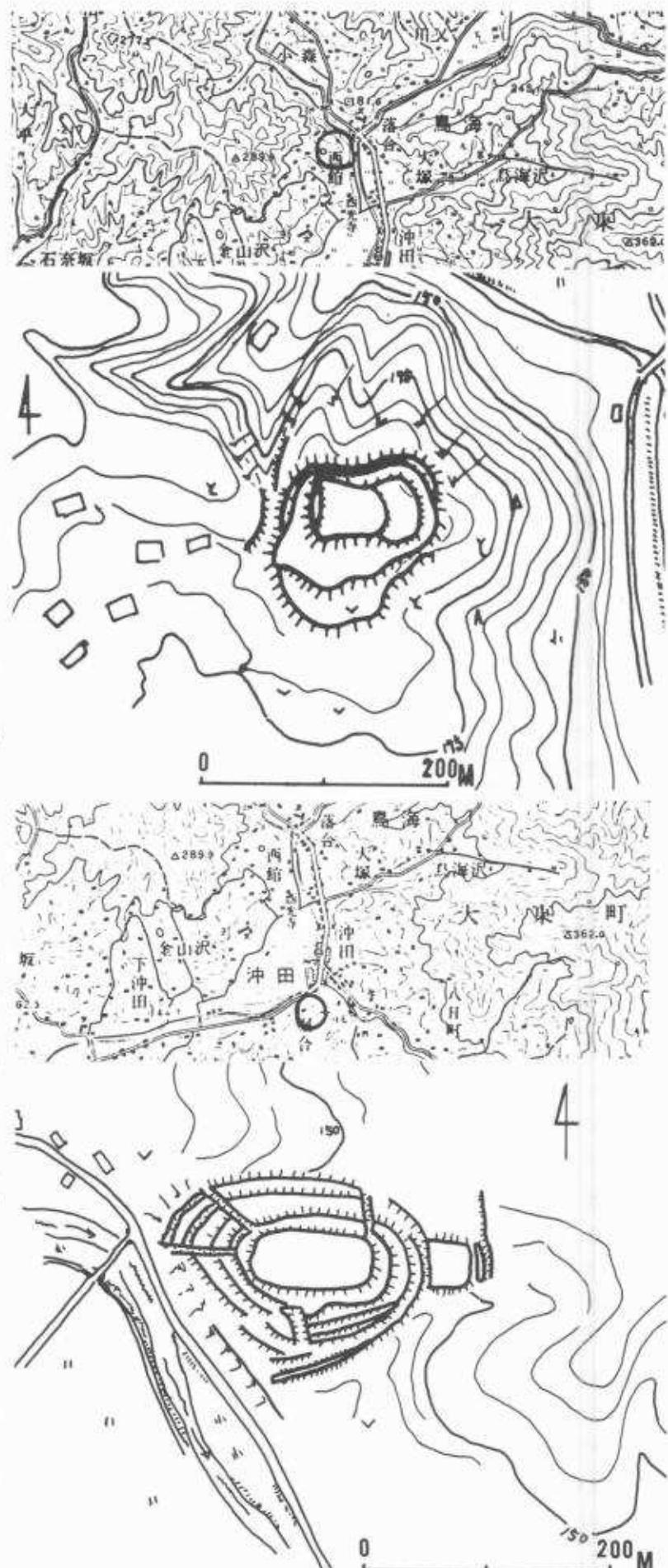
大東町立興田中学校の南西約400mの山頂にある。標高197.2m、東西200m南北200mである。鳥海川と中川川の合流地点を間に柏木館と対峙する。

本郭（65m×48m）西端に高さ3m程の土塁が見られる。本郭をとりまく様に2ノ郭がある。北面から西面にかけても帶郭が廻っている。西面から東西にかけては、幅30m程の平場が2つ伸びているが、東側で約8~12mになっている。南西から南東にかけては緩傾斜面で畠となり遺構不明瞭である。西の尾根には幅2mの空堀りが尾根を切っており、北側では深い沢へ落ちている。南側は緩傾斜の畠へとにつなげている。

『仙台領古城書上』には、「一川股城東西30間南北42間、二ノ丸東西8間南北70間城主及川修理」とある。『大東町史（上）』には、「東館城主弟及川長門信政居館、永禄2年柏木館とも落城、後小山美作居住、嫡子川又修理居住」の旨記載されている。

構 館（月館） 大東町沖田字下構

大東町立興田中学校の南東700m、八日町に入る手前右側の山陵にある。標高127m~165m。北側崖下を県道が走り、鳥海川が流れ。推定城域270m×200m。北と南に沢が入り込む。頂部本郭（100m×50m）に4本の空堀が四周より縦に入る。西面中央の堀は明瞭である。西及び南には6つの壇がある。帶郭は北側の一部において幅が広い（10m~20m）ものの、他はそれ以下で、接点は段差をもつていて。北西面においては、顯著である。本郭の南側は、尾根を空堀りで切る。その手前に40m×30m程の平場を設け、その手前に小さな空堀りを置く。本郭より3段下の帶郭が接する。空堀りの設け方（縦堀り）は他にあまり類例を見ない。城主は、及川隱岐又は讀岐とも伝わる柏木館主の弟で、及川一族である。柏木合戦と深く関わる。及川氏の後は、米谷平三郎が居住と伝わる。『仙台領古城書上』は、「月館城東西49間南北70間二ノ丸東西16間南北49間城主及川平三郎」とある。



要害館（遅沢館、新城館）大東町中川字新城

大東町立中川小学校の南東1.7km、中川地区から地蔵峠を越て大原に通ずる町道の東側の安昌寺の丘陵上に位置する。

北と南に大きな沢が入っており尾根の基部を狭くしている。空堀りと平場から構成されている。本郭（90m × 50m）と2ノ郭（60m × 40m）の間に空堀りがある。更に本郭の東には幅7m程の空堀りがあり尾根を切っている。2ノ郭の西側にも空堀り（幅8m、深さ3～4m）があり、北側においては、ゆるい沢に落ちている。南側は、本郭と2ノ郭を廻る腰郭状の平場に接している。この平場は本郭の東側において北面より前述の空堀に接し南面では、丘陵基部に接続する。

2ノ郭の西は、空堀りを隔てて遅沢川に臨む急峻な崖で、本郭南側は緩傾斜の畠である。城主は及川宮内、『大東町史（上）』『仙台領古城書上』『風土記御用書出』『日本城郭大系』『史料仙台領内古城館』等の文献に見られる。柏木合戦の後、天正年間及川氏居住と伝える。

八丁館（数流沢城、屏布館、臥牛館、八箇城）大東町摺沢字但馬崎

大船渡線摺沢駅の東約1kmの丘陵先端部にある。南側は柳折沢より流れる小河川があり急峻な崖となっている。標高70～105mの丘陵で幅6m程の空堀りにより尾根を切る。本郭（40m × 68m）を頂部に置き、2ノ郭（70m × 50m）、3ノ郭（22m × 15m）、4ノ郭（15m × 12m）とL字型に連なる。本郭、2ノ郭、3ノ郭までをとりまく帯郭がある。馬場、搦手、等の地名が残る。2ノ郭の下には「馬かくし」と呼ばれる小名も残る。尾根づたいに源八部落方面より引いたとされる引水の堰の跡が残っている。

前九年の役の伝えをもつが、詳細不明。岩渕氏累氏の居城と伝わる。『仙台領古城書上』では「山八丁城東西18間南北19間、二ノ丸東西32間南北36間城主岩渕大炊」とある。

『日本城郭大系』『史料仙台領内古城・館』『風土記御用書出』『大東町史（上）』がある。

